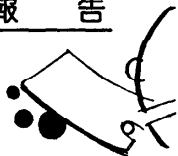


報 告



1984 年における規格委員会の活動†

規 格 委 員 会

1. ま え が き

前年の規格委員会の活動は第 25 巻第 6 号に報告した。この報告書は 1984 年 (昭和 59 年) に行った ISO/TC 97 および IEC/TC 83 と、それに対応する JIS 化への協力活動をまとめたもので、“電子計算機と情報処理”に関する標準化の動向を毎年継続的に報告することを趣旨としたものである。

2. 開催された国際会議

1983 年に開催された会議とそれに対する日本からの出席者は表-1 のとおりである。

3. TC 97 の活動

本年は第 11 回パリ総会 (1981) から 3 年目の年であり、5 月に第 12 回総会がストックホルムにて開催された。前年の TC 97 Advisory Group Meeting (1983 年 2 月, ボカラトン) で端を発した TC 97 再編成問題の仕上げの年にならざるをえず、TC 97 関係の国際会議も、2 月の TC 97 Advisory Group Panel (ジュネーブ)、5 月の TC 97 Advisory Group Meeting (ストックホルム)、12 月に開催されたこの年 2 回目の TC 97 Advisory Group Meeting のいずれの課題も TC 97 再編成あるいは、その手直しを主要課題とするものであった。

なお、和田規格委員長が委員をつとめる ISO/TAG 7 (Technical Advisory Group-Informatics and Tele-matics) が 9 月に開催されたが、これは IEC/TC 83 との関連が主要な議題である。なお、IEC/TC 83 の活動については、5. にて別途述べることにする。

(a) TC 97 Advisory Group Panel (3 月 28~29 日, ジュネーブ)

和田委員長および中田 SC 5 主査が出席した。前年

12 月に開催された TC 97 Advisory Group Meeting にて各国の提起した問題点を踏まえて、いわゆる TC 97 を 4 つの Group に分ける素案に対して Systems 関係は一括すべきであると主張して採択され、Application Elements, Equipment & Media, Systems の 3 Group となった。また、この会議で SC 13, 17, 22 の幹事国が宙に浮いていることが表面化した。

(b) 第 12 回 TC 97 スtockホルム総会 (5 月 16~18 日)、および TC 97 Advisory Group Meeting (5 月 14~15 日)

TC 97 総会に先立つ 2 日間の Advisory Group Meeting で主要な議論を終了した後、大要次のような決定を行った。なお、日本からの出席者は、和田弘、池田芳之、坂井喜毅の 3 名。

(i) 3 つの Grouping が決定

1) Application Elements :

SC 1, SC 7, SC 14

2) Equipment & Media :

SC 10, SC 11, WG 2 (旧 SC 12), SC 13, SC 15, SC 17, SC 19*, SC 23 (新設)

3) Systems :

SC 2, SC 6*, SC 18*, SC 20, SC 21* (旧 SC 16), SC 22* (旧 SC 5)

* 印は各 SC 間で改組にともない、作業課題のやりとりがあるものであるが、詳細は 6. 各 SC, WG の活動報告を参照されたい。

(ii) 各 Group 担当の Vice Chairman の任命

-Application Elements: Mr. T. Tateishi (カナダ)

-Equipment & Media: 和田 弘 (日本)

-Systems: Mr. Yve Le Roux (フランス)

(iii) SC 23 (光ディスク) の設立

日本が TC 97 で初の SC の幹事国となった。

(c) TAG 7 & TAG 7/ITCG 会議 (9 月 21 日)

和田委員長の報告要旨は次のとおり :

(i) ISO/TAG 7 と IEC/ITCG の話し合いは収

† Report on the Standardization Activities for Information Processing and Computers in 1984 by Japanese National Committee for ISO/TC 97.

表-1 1984年に開催された国際会議

回数	委 員 会	期 間	場 所	日 本 代 表 出 席 者
12	TC 97	5/16~5/18	ストックホルム	和田 弘 (成蹊大), 池田芳之 (IBM), 坂井喜毅 (工技院)
	AG Panel	3/28, 29	ジュネーブ	和田 弘 (成蹊大), 中田育男 (筑波大)
	Chairman & Vice Chairmen	4/2	ジュネーブ	和田 弘 (成蹊大)
	Equipment and Media Group	5/8	ベルリン	和田 弘 (成蹊大)
	AG	5/14, 15	ストックホルム	和田 弘 (成蹊大), 池田芳之 (IBM)
	TAG 7	9/20, 21	ジュネーブ	和田 弘 (成蹊大)
	AG	12/17~12/19	パ リ	和田 弘 (成蹊大), 池田芳之 (IBM), 高橋 茂
21	SC 1	6/4~6/8	ストックホルム	西野博二 (筑波大)
18	SC 2	4/23~4/27	京 都	和田英一 (東大), 伊藤興史郎 (NTT), 中村利武 (富士通), 磯崎 澄 (NTT), 吉田 滋 (東芝)
	WG 4	4/18~4/20	東 京	和田英一 (東大), 吉田 滋 (東芝), 長谷川雅美 (日本 DEC), 伊藤興史郎 (NTT), 神原真一 (NTT)
		9/24~9/28	ロンドン	伊藤興史郎 (NTT)
	WG 8	4/16~4/18	東 京	磯崎 澄 (NTT), 河本清人 (IBM), 加藤重信 (ユニパック), 東信弘 (KDD), 伊藤興史郎 (NTT), 中野博隆 (NTT)
	WG 1	11/2, 3	ジュネーブ	栗田 信 (富士通)
	WG 2	10/29~11/1	ジュネーブ	栗田 信 (富士通), 長谷川雅美 (DEC)
	WG 8	12/10~12/14	ミュンヘン	安田 浩 (NTT)
	SC 5			なし
	諮問委	4/11	ジュネーブ	中田育男 (筑波大)
	WG 2 (Graphics)	6/13~6/20	Benodet	木村文彦 (東大)
	WG 9 (FORTRAN)	4/9~4/12	ジュネーブ	中田育男 (筑波大)
21	SC 6	10/22~10/26	ワシントン	谷 公夫 (NTT), 飯倉正夫 (NTT), 藤本 寛 (日電), 上垣内巧 (日電), 田部幹雄 (日電), 七條卓巳 (東芝), 河本清人 (IBM), 川村克彦 (沖)
	WG 1	3/5~3/9	ストックホルム	谷 公夫 (NTT), 永田 悟 (富士通)
		10/15~10/19	ワシントン	谷 公夫 (NTT), 上垣地巧 (日電), 七條卓巳 (東芝)
	WG 2	4/2~4/11	チューリッヒ	飯倉正夫 (NTT), 田部幹雄 (日電), 佐藤文和 (沖電気)
		10/15~10/19	ワシントン	飯倉正夫 (NTT), 河本清人 (IBM), 田部幹雄 (日電)
	WG 3	2/27~3/1	ト リ ノ	藤本 寛 (日電)
		10/15~10/19	ワシントン	藤本 寛 (日電)
	WG 4	10/16, 17	ワシントン	川村克彦 (沖)
	WG 5	10/16~10/19	ワシントン	河本清人 (IBM)
12	SC 7	6/25~6/27	トロント	菅 忠義 (学習院大), 東 基衛 (日電), 金子英一 (東芝), 黒田寿一 (三菱電機), 長野宏宣 (NTT), 二村良彦 (日立), 松原友夫 (日立 SK), 松山辰郎 (富士通)
	SC 9			なし
	SC 10			なし
12	SC 11	10/22~10/26	ベルリン	石井 治 (日本工大), 磯崎 真 (三菱電機), 多羅尾悌三 (富士通), 小林敏郎 (ソニー), 伊藤陽之助 (東芝), 矢野矩雄 (NTT)
	WG	3/7~3/10	ロンドン	磯崎 真 (三菱電機), 伊藤陽之助 (東芝), 徳永賢次 (住友 3M), 中山正之 (ソニー), 増淵政行 (メモレックス), 溝口俊明 (Y・E・データ)
	SC 12			なし
8	SC 13	10/2~10/5	ベルリン	欠席
	SC 14			なし
9	SC 15	9/24~9/28	ジュネーブ	平須賀しづ江 (IBM), 後藤和夫 (日電)
	SC 16			
	WG 1	3/12~3/16	ワシントン	西垣秀樹 (沖電気), 今本善信 (日電)
		6/19~6/28	コペンハーゲン	高橋 修 (NTT), 中沢 真 (日立), 川村克彦 (沖電気), 田部幹雄 (日電)
	Ad hoc (Naming and Addressing)	10/29~11/2	ワシントン	今本善信 (日電)
	Ad hoc (形式記述技法 B)	9/17~9/21	パ リ	浅野正一郎 (東大)

回数	委員会	期 間	場 所	日 本 代 表 出 席 者
5	セキュリティ Ad hoc	10/29~11/1	ト ロ ン ト	川村克彦 (沖電気)
	WG 4 Ad hoc	2/27~3/2	ロ ン ド ン	小林善和 (IBM)
		6/20~6/27	コペンハーゲン	高橋祥兼 (NTT), 小林善和 (IBM), 小林偉昭 (日立)
	WG 5	3/5~3/9	ロ ン ド ン	小林善和 (IBM)
	VT	6/14, 15	コペンハーゲン	佐藤 健 (日立)
		6/18~6/22	コペンハーゲン	高橋祥兼 (NTT), 佐藤 健 (日立), 杉原正一 (富士通), 平澤 裕 (東芝), 小花貞夫 (KDD), 川村敏雄 (日電), 河本清人 (IBM)
	VT リアセメ ント	9/15	ジュネーブ	佐藤 健 (日立)
	VT ラポータ	9/17~9/21	ジュネーブ	佐藤 健 (日立)
	CASE Ad hoc	10/1~10/5	ニュージャージー	神山裕一 (KDD)
	ファイル伝送 ラポータ	10/8~10/12	ボ ス ト ン	河本清人 (IBM)
	WG 6	6/25~6/29	コペンハーゲン	田部幹雄 (日電), 武田浩一 (富士通), 平澤 裕 (東芝), 小花貞夫 (KDD), 水野忠則 (三菱電機)
	SC 17	11/5~9	ベルリン	木澤 誠 (情報大), 高田輝男 (全銀連), 尾澤好一 (NCR), 高橋廣光 (三菱電機)
	WG 4	5/28~30	パ リ	家木俊温 (NTT), 林 義明 (大日本印刷)
		9/27, 28	ミュンヘン	家木俊温 (NTT), 林 義明 (大日本印刷), 安河内秀次 (東京タツノ), 中島伊尉 (日立), 陸名健治 (カシオ)
	WG 5	6/18, 19	モンテリオール	高田輝男 (全銀連), 尾澤好一 (NCR)
	SC 18	5/8~5/10	ベルリン	高橋 茂, 松岡 毅 (NTT), 若島陸夫 (ユニパック), 徳永英二 (IBM), 吉田浩三 (日立)
	Ad hoc	9/11~14	ジュネーブ	高橋 茂
	WG 1	9/17~9/21	ミュンヘン	小林一彦 (日電)
	WG 2	10/24~10/26	パ リ	高橋 茂, 中村真和 (日立)
	WG 3	9/24~9/28	オ タ ワ	小田一博 (東芝), 安藤寿茂 (富士通)
	WG 4	2/6~2/10	ロ ン ド ン	清水 豊 (日電), 小林 洋 (KDD)
		9/25~10/2	東 京	西村卓美 (NTT)
	WG 5			
	WG 3.5 合同 Ad hoc	9/19~9/21	ト ロ ン ト	安藤寿茂 (富士通)
	SC 19 Ad hoc	4/10~15	ロ ン ド ン	水原 滋 (キヤノン)
	WG 3	6/25~28	ストックホルム	尾澤好一 (NCR), 高橋廣光 (三菱電機)
		11/19~21	パレンシア	尾澤好一 (NCR), 斉藤 渡 (沖電気)
	WG 6	9/17~19	ストックホルム	高橋廣光 (三菱電機), 大迫昭和 (沖電気)
1	SC 20	1/30~2/2	ボ ン	宮川 洋 (東大), 中村勝洋 (日電), 宮口庄司 (NTT)
	SC 21 Planning	10/17~10/20	ワ シ ン ト ン	元岡 達 (東大), 飯野守夫 (日立), 小林善和 (IBM), 南 昌宏 (富士通), 西川清史 (NTT), 勅使河原可海 (日電)
	TC 83	5/2~5/4	ミ ラ ノ	和田 弘 (成蹊大), 鶴田清治 (IBM), 松岡 毅 (NTT), 小柳武和 (JETRO)
	WG 1	3/28, 29	ジュネーブ	田部幹雄 (日電)
	WG P & R	3/26, 27	ジュネーブ	田部幹雄 (日電)
	WG P & R	4/30, 5/1	ミ ラ ノ	和田 弘 (成蹊大)

敏するものがないので、今後の開催は見合わせる事になった。今後は JTPC (Joint Technical Program Committee) に委ねられる事になった。

(ii) ISO 理事会で、先端技術分野の標準化を促進するため、別に定める資格を持った団体がつくった規格は、いきなり DIS の投票に付することができるという手続 (Fast Track Procedure) が決議されたこと。

(d) TC 97 Advisory Group Meeting (12月17~19日, パリ)

日本からは、和田弘、高橋茂、池田芳之が出席した。主なる事項ないし決議は以下のとおり：

(i) 新たに TC 97/WG 2 となった旧 SC 12 の Convenor として BSI の Mr. Underwood が承認された。

(ii) SC 22 の幹事国としてカナダ (SCC) が決った。論理上は関係ないが、SC 22 の所属が Systems から、カナダの Mr. Tateishi が V.C. である Application Elements に代ることが決った。

(iii) フランスとイギリスで争っていた SC 17 の幹事国は ISO/CS の裁定で BSI に決った。

(iv) ISO 理事会で決議された Fast Track Procedure については、一応差し戻し、TC 97 内に Ad-hoc Group をつくり ISO/CS と話し合うことになった。

(v) CCITT との liaison については、ISO/IEC が初めて正式な liaison 機関と認められ、CCITT に寄書ができることになった。

(vi) SC 21 については、GKS, Data Base は別個にすべきとか、大き過ぎるとかの議論がでた。

(vii) 日本から提案した IEC/47 B の Work Item への懸念と、その microprocessor は TC 97 が手が

けるべきという提案は、日本として NWI にすることの検討を依頼された。

(viii) DIN が本年一杯で辞退を表明している SC 13 の幹事国は、1985 年 4 月一杯まで名乗りをあげることを待つことになった。

(e) その他：

(i) SC 2 総会（京都）、同 WG 4 & 8（東京）および SC 18/WG 4 & 5（東京）が開催された。

(ii) ISO/TC 97 関係で、1984 年に ISO 国際規格となったものおよび国際規格案 (DIS) として審議中のものは表-2 および表-3 に示す。

表-2 ISO 国際規格

ISO No.	Title
1538	Programming languages—ALGOL 60
1864	Information processing—Unrecorded 12.7 mm (0.5 in) wide magnetic tape for information interchange—32 ftpmm (800 ftpi) NRZ1, 126 ftpmm (3 200 ftpi) phase encoded and 356 ftpmm (9 042 ftpi), NRZ1
2382/1	Data processing—Vocabulary—Part 01: Fundamental terms
2382/9	Data processing—Vocabulary—Part 09: Data communication
2382/13	Data processing—Vocabulary—Part 13: Computer graphics
2593	Data communication—34 pin DTE/DCE interface connector and pin assignments
3244	Office machines and data processing equipment—Principles governing the positioning of control keys on keyboards
3309	Information processing systems—Data communication—High-level data link control procedures—Frame structure
4232/3	Office machines—Minimum information to be included in specification sheets—Part 3: Postal franking machines
4335	Data communication—High-level data link control procedures—Consolidation of elements of procedures
5138/9	Office machines—Vocabulary—Part 9: Typewriters
5652	Information processing—9-Track, 12.7 mm (0.5 in) wide magnetic tape information interchange—Format and recording, using group coding at 246 cpm (6 250 cpi)
5654/1	Information processing—Data interchange on 200 mm (8 in) flexible disk cartridges using two-frequency recording at 13 262 ftprad on one side—Part 1: Dimensional, physical and magnetic characteristics
5806	Information processing—Specification of single-hit decision tables
6098	Information processing—Self-loading cartridges for 12.7 mm (0.5 in) wide magnetic tape
6373	Data processing—Programming languages—Minimal BASIC
6523	Data interchange—Structures for the identification of organizations
6548	Data processing—Description of interface between process computing system and technical process
6901	Information processing—Magnetic disk for data storage devices—160 000 flux transitions per track, 356 mm (14 in) outer diameter
6902	Information processing—Magnetic disk for data storage devices—107 500 flux transitions per track, 266 mm (10.5 in) and 356 mm (14 in) diameter
7350	Text communication—Registration of graphic character subrepertoires
7480	Information processing—Start-stop transmission signal quality at DTE/DCE interfaces
7487/3	Information processing—Data interchange on 130 mm (5.25 in) flexible disk cartridges using modified frequency modulation recording at 7 958 ftprad, 1.9 tpm (48 tpi), on two sides—Part 3: Track format B
7498	Information processing systems—Open systems interconnection—Basic Reference Model
7809	Information processing systems—Data communication—High-level data link control procedures—Consolidation of classes of procedures
7901	Information processing—Unrecorded, hard-sectored, 130 mm (5.25 in) flexible disk cartridges, one or two-sided use—Dimensional, physical, and magnetic characteristics

表-3 国際規格案

DIS No.	Title
1001	Information processing—File structure and labelling of magnetic tapes for information interchange
1117	Information processing—Character structure for start/stop and synchronous transmission
1860	Information processing—precision reels for magnetic tape used in interchange instrumentation applications
1864	Information processing—Unrecorded 12.7 mm (0.5 in) wide magnetic tape for information interchange—32 ftpmm (800 ftpi) NRZ1, 126 ftpmm (3 200 ftpi) phase encoded and 356 ftpmm (9 042 ftpi) NRZ1
2022	Information processing—ISO 7-bit and 8-bit coded character sets—Code extension techniques
2111	Data communication—Basic mode control procedures—Code independent information transfer
2375	Data processing—Procedure for registration of escape sequences
2382/15	Data processing—Vocabulary—Part 15: Programming languages
2382/18	Data processing—Vocabulary—Part 18: Distributed data processing
2382/21	Data processing—Vocabulary—Part 21: Interfaces between process computer systems and technical processes
2382/22	Data processing—Vocabulary—Part 22: Calculators
4057/ DAD 1	Information processing—Data interchange on 6.30 mm (0.25 in) magnetic tape cartridge, 63 bpm (1 600 bpi) phase-encoded Addendum 1
4335/ DAD 3	Data communication—High level data link control procedures—Elements of procedures Addendum 3
4873	Information processing—8 bit code for information interchange—Structure and rules for implementation
5138/6	Office machines—Vocabulary—Part 6: Calculators
5138/7	Office machines—Vocabulary—Part 7: Postal franking machines
5138/8	Office machines—Vocabulary—Part 8: Document copying machines
5138/11	Office machines—Vocabulary—Part 11: Document inserting machines
5807.2	Information processing—Documentation symbols and conventions for data, program and system flowcharts, program network charts and system resources charts
6068	Information processing—Recording Characteristics of instrumentation magnetic tape (including telemetry systems)—Interchange requirements
6093.2	Information processing—Representation of numerical values in character strings for information interchange
6329	Duplicators and document copying machines—Part 1: Symbols
6371	Information processing—Interchange requirements and test methods for unrecorded instrumentation magnetic tape
6522	Programming languages—PL/I—General purpose subset
6592	Information processing—Guidelines for the documentation of computer-based application systems
6593	Information processing—Program flow for processing sequential files in terms of record groups
6596/1	Information processing—Data interchange on 130 mm (5.25 in) flexible disk cartridges using two-frequency recording at 7 958 ftprad on one side—Part 1: Dimensional, physical and magnetic characteristics
6596/2	Information processing—Data interchange on 130 mm (5.25 in) flexible disk cartridges using two-frequency recording at 7 958 ftprad on one side—Part 2: Track format for 1.9 tpm (48 tpi)
6937/3	Information processing—Coded character sets for text communication—Part 3: Control functions for page-image format
6951	Information processing—Processor system bus interface (EUROBUS A)
7065/1	Information processing—Data interchange on 200 mm (8 in) flexible disk cartridge using modified frequency modulation recording at 13 262 ftprad on two sides—Part 1: Dimensional, physical and magnetic characteristics
7065/2	Information processing—Data interchange on 200 mm (8 in) flexible disk cartridges using modified frequency modulation recording at 13 262 ftprad, 1.9 tpm (48 tpi) on two sides—Part 2: Track format
7069	Information processing—Small computer-to-peripheral bus interface—Data transfer between computer and peripherals
7297	Information processing—Magnetic disk for data storage devices—96 000 flux transitions per track, 200 mm (7.9 in) outer diameter, 63.5 mm (2.5 in) inner diameter
7298	Information processing—Magnetic disk for data storage devices—158 000 flux transitions per track, 210 mm (8.3 in) outer diameter, 100 mm (3.9 in) inner diameter
7478.2	Data communication—Multilink procedures

DIS No.	Title
7478/ DAD 1	Information processing systems—Data Communications—Multilink procedures
7487/1	Information processing—Data interchange on 130 mm (5.25 in) flexible disk cartridges using modified frequency modulation recording at 7 958 ftprad, 1.9 tpmm (48 tpi), on both sides—Part 1: Dimensional, physical and magnetic characteristics
7487/2	Information processing—Data interchange on 130 mm (5.25 in) flexible disk cartridges using modified frequency modulation (MFM) recording at 7 958 ftprad, 1.9 tpmm (48 tpi), on two sides—Part 2: Track format A
7501	Identification cards—Machine readable passport
7580.2	Identification cards—Card originated messages—Content for financial transactions
7776	Information processing systems—Data Communications—High-level data link control procedures—Description of the X. 25 LAPB-compatible DTE data link procedures
7809/ DAD 1	Information processing systems—Data communication—High-level data link control procedures—Consolidation of classes of procedures Addendum 1
7810	Identification cards—Physical characteristics
7811/1	Identification cards—Recording technique—Part 1: Embossing
7811/2	Identification cards—Recording technique—Part 2: Magnetic stripe
7811/3	Identification cards—Recording technique—Part 3: Location of embossed characters on ID-1 cards
7811/4	Identification cards—Recording technique—Part 4: Location of read-only magnetic tracks—Tracks 1 and 2
7811/5	Identification cards—Recording technique—Part 5: Location of read-write magnetic track—Track 3
7826	Data interchange—General structure for the representation of classifications
7846	Industrial real-time FORTRAN—Application for the control of industrial processes
7942	Information processing—Graphical Kernel System (GKS)—Functional description
8063/1	Information processing—Data interchange on 6.30 mm (0.25 in) wide magnetic tape cartridge using IMFM recording at 252 ftpmm (6 400 ftpi)—Part 1: Mechanical, physical and magnetic properties
8063/2	Information processing—Data interchange on 6.30 mm (0.25 in) wide magnetic tape cartridge using IMFM recording at 252 ftpmm (6 400 ftpi)—Part 2: Track layout and method of recording for data interchange in start/stop mode
8064	Information processing—Reels for 12.7 mm (0.5 in) wide magnetic tapes—Size 16—Size 18—Size 22
8072	Information processing systems—Open systems interconnection—Transport service definition
8073	Information processing systems—Open systems interconnection—Connection oriented transport protocol specification
8208	Data communication—X. 25 packet level protocol for data terminal equipment
8211	Information processing—Specification for a data descriptive file for information interchange
8326	Information processing systems—Open systems interconnection—Basic connection oriented session service definition
8327	Information processing systems—Open systems interconnection—Basic connection oriented session protocol specification
8342	Monochrome test chart for document copying machines—Specifications for the chart and its storage envelope
8378/1	Information processing—Data interchange on 130 mm (5.25 in) flexible disk cartridge using modified frequency modulation recording at 7 958 ftprad, 3.8 tpmm (96 tpi), on two sides—Part 1: Dimensional, physical and magnetic characteristics
8378/2	Information processing—Data interchange on 130 mm (5.25 in) flexible disk cartridges using modified frequency modulation recording at 7 958 ftprad, 3.8 tpmm (96 tpi), on two sides—Part 2: Track format A
8378/3	Information processing—Data interchange on 130 mm (5.25 in) flexible disk cartridges using modified frequency modulation recording at 7 958 ftprad, 3.8 tpmm (96 tpi), on two sides—Part 3: Track format B
8462/1	Data interchange on 6.30 mm (0.25 in) magnetic tape cartridge using GCR recording at 394 ftpmm (10 000 ftpi)—Part 1: Physical, magnetic and mechanical characteristics
8462/2	Data interchange on 6.30 mm (0.25 in) magnetic tape cartridge using GCR recording at 394 ftpmm (10 000 ftpi)—Part 2: Streaming mode
8481	Data communication—DTE to DTE physical connection using X. 24 interchange circuits with DTE provided timing

4. 規格委員会の動き

ISO の動きに呼応して、規格委員会が本年中に5回(第76回～第80回)、Ad-hoc Meeting が1回開催された。5回の規格委員会は、国際規格案審議を主務とする日本工業標準調査会・ISO/TC 97 情報処理専門委員会(第37回～第41回)との合同会議として開催された。

規格委員会の委員と主な審議事項は次のとおりである。

委員長 和田 弘

幹 事 松本大四、池田芳之

委 員 新井克彦、安楽芳伸、石井 治、魚木五夫、
浦城恒雄、大桑邦夫、太田健一郎、大山政雄、
尾沢好一、金子礼三、菅 忠義、渋谷多喜夫、
島 弘志、島内剛一、関口 守、瀬野健治、
高橋 茂、田中克彦、筑後道夫、鶴田清治、
棟上昭男、東山 尚、研野和人、中田育男、
西野博二、堀江 達、宮川 洋、元岡 達、
森 宗正、吉岡 忠、和田英一

(a) 規格委員会 Ad-hoc Meeting (2月10日)

3月28日～29日パリにて開催予定の Advisory Group Panel 対処方針の決定。

(b) 第76回(3月16日) ISO/TC 97 情報処理専門委員会との合同会議:

SC 20 主査宮川洋氏(東大)の紹介、DIS 5806, 6937/3, 8072, 8073 の審議および回答原案の承認、SC 16/WG 1, WG 4, WG 5, SC 20 の国際会議報告、SC 1, SC 6, SC 7, SC 9, SC 11, SC 13, SC 16, SC 20 の活動報告、59年度予算案および会計報告の承認。

(c) 第77回(4月27日) ISO/TC 97 情報処理専門委員会との合同会議

工技院からの委員は向井保氏から太田健一郎氏、日本ユニパックの委員は松山俊介氏から森宗正氏へ。DIS 5807.2, 8326, 8327 の審議と回答原案の承認。SC 6/WG 1, 2, 3, SC 11 と WG, SC 16/WG 1, 2, 4, 5, 6, SC 18/WG 5 (東京) の各国際会議報告。SC 6, SC 16, SC 18 の活動報告。TC 97 Advisory Group Panel 報告、会計報告と承認。

(d) 第78回(6月22日) ISO/TC 97 情報処理専門委員会との合同会議。

理事幹事は永井雄二氏(日立)から松本大四氏(三菱電機)へ、DIS 6093.2, 7486, 8211 の審議と回答原案の承認、SC 1, SC 2 (京都および東京)、SC 18 お

よび WG 2, ISO/TC 97 総会の国際会議報告。SC 5, SC 13, SC 16, SC 18, SC 20 の活動報告、59年度予算案と会計報告の承認。

(e) 第79回(9月28日) ISO/TC 97 情報処理専門委員会との合同会議

Mr. Yve Le Roux (ISO/TC 97 V.C. for Systems) の挨拶、DIS 2382/15, 2022, 2375, 7478-2, 8348, 6592, 6593, 8378/1, 6591, 7069 の審議と回答原案の承認、SC 7, SC 5/WG 2, SC 16/WG 1, 4, 5, 6, HOD/C, SC 21 Planning Meeting, SC 18 改組のための Ad-hoc Meeting, ISO/CS/TAG 7 の各国際会議報告、SC 5, SC 6, SC 9, SC 11, SC 16 の活動報告、SC 23国内(委)主査三橋慶喜氏の紹介と、SC 23 Chairman 予定の島田潤一氏と Secretary 予定の三佐尾武雄氏の紹介と了承、会計報告と承認。

(f) 第80回(11月30日) ISO/TC 97 情報処理専門委員会との合同会議

DIS 6522, 8063/1, 2, 8462/1, 2, 1860, Draft Addendum ISO 4335/DAD 3 の審議と回答原案の承認。SC 2/W 1, 2, 4, SC 6 総会および WG 1～5, SC 11, SC 15, SC 18/WG 2, SC 18/WG 1, 3, 4, 5, SC 21 Planning Meeting の各国際会議報告。SC 1, SC 6, SC 10, SC 13, SC 20, SC 21, SC 23 の活動報告。TC 97 Advisory Group Meeting (12月)対策、規格委員会強化策の討議、会計報告と承認。

5. IEC/TC 83 の活動

1983年の設立当初から ISO/TC 97 との重複が云々され、それを screening するための WG P & R が設けられ現在までに決った課題は、①HES (Home Electronics System), ②LAN, ③Connector, ④Functional Safety である。本年 HES を扱う WG 1 が設立され、国内では電子機械工業会に委託されている。また光ファイバ LAN を扱う WG 2 の設置も正式に決定された。現在では TC 83 は、各国際標準機関や、グループ相互にまたがる標準テーマについて技術的調整を行うことが目的化しており、存在理由を問われかねない。TC 83 を積極的にサポートしているのは、西独(ゾーメンス)、オランダ(フィリップス)であり、アメリカは、くさびを打ち込む意味から積極的である。カナダ、フランス、スウェーデンは否定的であり、英国はテーマによって対応が異っている。

本年は5月2～4日、ミラノにおいて TC 83 総会が開催され、日本からは、和田、鶴田、小柳、松岡が

出席した。前日の5月1日のWG P & Rには、小柳、松岡が出席した。この会議で光ファイバLAN, Functional Safety を採り上げることになった。

国内委員会の活動は、規格委員会のなかで、ときには単独で開催されているが、いまだ積極的にテーマを採りあげて活動を行ってはいない。

6. 各 SC, WG の活動報告

6.1 SC 1: Vocabulary

主査 西野 博二

(1) 概 要

データ処理用語集(DPV)は、現在24の部に区分されている。従来、この区分は章(chapter)と呼ばれていたが、昨年部(part)と呼ばれることになった。24部のうち、昨年末の時点で国際規格の部は17、国際規格案の部が3、原案など作業中のものが4ある。また、国際規格の部で改訂中のものが6ある。

これらは6つのWGで審議され、毎年6月のSC1総会で作業結果をみて、国際規格や同案がきめられる。

(2) 国 際 活 動

第21回のSC1総会は、1984年6月4日から8日までストックホルムで開催された。参加者は9カ国の29名で、我が国からは西野博二(筑波大)が出席した。会議では14の部についての審議が行われた。

各部ごとの審議の結果は省略し、ここでは用語集全体に関する主な審議事項について述べる。

(a) 国際規格の部の改訂

用語集で最初に国際規格になったいくつかの部は、1974年の制定であるから、その後の情報処理技術の急速な進歩によって、すでに死語となったもの、用語の内容が相当に変化したもの、新しい用語の出現などでかなりの改訂が必要となってきた。そのため、数年前より改訂作業が始まっていたが、昨年第1部の改訂版が初めて新しい国際規格となった。

(b) 事務機械用語集(OMV)の引継

旧TC95で作成していた事務機械用語集を、SC1でどのように取扱うかが大きな問題となっていたが、ようやく具体的な方針が以下のように決まった。

OMVの6章(Calculator)と10章(Word Processing)だけを、現在のDPVに併合し、その他の11の章についてはSC1では責任を持ちかねるので、TC154の責任に委ねる。

ただし、この決定は相手があることなので、TC154が受け入れなければ、前述の11の章は孤児となる。

また、OMVの6章をDPV流に改訂したものが、22部として国際規格となった(ただし、昨年中にはまだ印刷発行されていない)。

(3) 国内活動とその問題点

我が国のJIS C 6230(情報処理用語)は、ISOのDPVに準拠するという基本方針があるので、昨年新しく国際規格となった第9部(Data Communication)と第13部(Computer Graphics)のJIS原案をSC1のメンバが主体となって作成中である(詳細は7.参照)。

今後もDPVの改訂や新しい部分の発行に伴い、我が国のJISの改訂と増補が頻繁に行われる見込みである。しかし、このことを逆に見れば、国際規格よりも数年遅れで我が国のJIS情報処理用語が制定されるという遅れの問題が発生する。また、必要とされる分野の用語が、まだISOで審議中であるとか、まだ採り上げていないなどの理由で、我が国での標準化が手つかずの状態が生ずる。

このような事態をできるだけ少くするために、我が国から新しい作業項目の提案や審議のための寄書を積極的に行うなどの対応はもちろん必要である。しかし、ISOでは国際的な合意をとる必要があるためと、会議が頻繁には開けないなどのために、審議には長い期間がかかるのが通例である。

したがって、情報処理技術の最近の発展と社会への普及に対応するためには、我が国での用語の標準化をISOのDPVに先行して行うことが必要になっていると思われる。

6.2 SC 2: Character Sets and Information Coding

主査 和田 英一

(1) 概 要

国内委員会の活動(定例10回、作業小委員会5回)のほか、国際会議として4月のWG4、WG8会合の東京開催、SC2総会(第18回)の京都開催を行った。これらをとおして、日本語漢字体系(WG4、WG2)、ビデオテキストなどのマルチメディアの扱い(WG8)を中心に検討、提案した。

(2) 国 際 会 議

総会の日本開催は、第4回(1971年10月、東京)以来のことであり、和田(東大)を始めとする多数のメンバが出席の上(11カ国、40名出席)、日本関連課題の提案、展示などを含めて実施した(日本寄書7件)。また、9~12月にかけて、WG4、2、1、8会合が開催さ

れ、伊藤（横研）、長谷川（日本 DEC）、栗田（富士通）、安田（横研）がそれぞれ出席した。

主要事項は次のとおりである。

(a) SC 2 の新スコープとして、musical tone や sound を含むか論議の上、ビデオテックスでの必要性が高いことより、audio information を対象に含むこととした（WG 8 関連）。

(b) ISO 2022（符号拡張法）の改訂（96 個の図形符号を扱う符号表の追加など）につき第 3 版原案を作成した。なお日本からは 11 項目の改良案を提示し、そのほとんどが採用された（WG 1 関連）。

(c) 漢字が日本語固有なものでなく、汎用的な課題として認知され、テキスト構造として従来の欧文（横書き）に加えて、漢字の縦書き、アラビア文字（逆横書き）などを含む汎用性のある構成とするよう見直しが行われた（DIS 6937/3—テキスト通信用制御符号—Addendum の作成；WG 4 関連）。

(d) SC 2 新課題として、漢字を始めとする各国語（図形文字セット）を包含し、統一的に扱える共通符号表を作成することが承認され、対応する WG 2 が新設された。10 月に第 1 回会合が開かれ、含むべき言語（スクリプト）の選択、表現方法など基本的な考え方を固めた（WG 2 関連）。

(e) ISO 2375（符号表登録ルール）の改訂が行われ、登録提案へのアピール方法、記入要領の補足など新ルールが定められた。さらに AG（Advisory Group）メンバ（4 名）の 1 人に日本が指名された。

(3) 国内活動

ISO の活動と対応する項目を中心に検討を進めた。主要事項は、次のものである。

(a) テキスト通信

日本語テレテックスを国際標準に合致したものとするため、CCITT/SG 8 への働きかけと連携の上、欧文文書に加えて日本語文書の取扱いに必要な機能の提案を昨年より継続して行った（縦書きを指定する制御機能の新設など 8 種の機能拡充）。前述の ISO 活動に対応した日本提案の整理と WG 4 への寄書をまとめた。これまでの論議により、日本提案事項については、一部の継続検討事項（半角、倍角を指定する GSM の追加）を除いてほぼ認められた。

(b) 符号拡張法

従来のテキスト情報（コード系）の世界での取扱いのみならず、(i) 図形、画像、イメージ、音声情報などのニューメディアの混在に対する統一的な扱い、

(ii) ビデオテックス各国方式の切替などサービス切替への展開など取扱い対象の範囲が拡大している。このための符号拡張（メディア切替機能など）の必要性につき考え方を整理し、WG 1, 8 へ提案した。

(c) その他

JIS C 6226（情報交換用漢文字符号系）の改訂（1983 年版）に伴う新しい図形文字符号表の国際登録作業を行い完了した。また、JIS C 6229（機械読取り可能文字の符号）の改訂に対応する図形文字符号表（8 種）の国際登録作業中である。

6.3 SC 5: Programming Languages

主査 中田 育男

(1) 国際活動

SC 5 本会議は 2 年に 1 回開かれることになっており、1984 年には開かれなかった。本年は TC 97 の再編成が行われ、SC 5 にとっては、プログラミング言語そのものだけが残り（それを新たに SC 22: Application Systems Environments and Programming Languages とし）、グラフィックス関係、データベース関係、OS コマンド言語は新 SC 21 へ移り、テキスト処理言語は SC 18 へ移ることになった。SC 5 全体としては、この再編成への対応を検討したのが主であり、新 SC 22 の幹事国の決定（カナダ）が遅れたこともあり、特に報告すべき活動はない。なお、SC 22 の名称に、我が国の主張が認められて、Programming Languages という言葉が入った。

(2) 国内活動

- (a) PL/I
- (b) COBOL
- (c) FORTRAN
- (d) Pascal
- (e) Graphics

以上はそれぞれの WG の報告を参照されたい。なお Graphics の WG は前記 TC 97 再編成により SC 21 に属することになった。

(f) Ada

米国規格となった Ada を DP とすることに賛成投票をした。なお、今後 Ada に関する日本の改良案を積極的に検討していくために Ada WG（主査 米田 信夫）を新設する予定である。

(g) APL

DP 8485 となった原案に対し、日本電子工業振興協会の協力をえて、意見付き賛成の投票をした。結果は意見付き賛成が多く、さらに改訂が行われると思われる。

(h) データベース

IRDS (Information Resource Dictionary System) を新作業項目とすることに賛成した。結果は賛成多数で成立した。

(i) テキスト処理

テキスト処理用の言語 (エディタの機能を含む) として提案されているものを Draft Proposal とすることに対しては、機能が整理されていないという理由で反対した。

6.4 SC 5/PL/I WG

主査 永瀬 淳夫

PL/I フルセット仕様 (ISO 6160-1979) の改訂については、引き続き ANSI の X3J1 委員会が中心となって検討を進めており、現在、言語の明確化、変更および拡張についての提案を審議している。X3J1 委員会では、1986 年の夏か秋には改訂版を提出する予定で作業を進めている。なお、この作業結果を踏まえて、ANSI をホストとする WG 11 を 1984 年 4 月に開催する予定であったが、参加国がないため中止になった。

現規格は IS として制定されてから 5 年を経過する。ISO では、5 年を経過した IS の見直しを行っており、その一環として、現規格に基づいた処理系がインプリメントされているか否か調査するための質問事項を各国委員に送付している。この回収結果に基づき、現規格をそのまま承認するか、改訂すべきか、取り消すべきかを決定するための郵便投票が行われる予定である。

汎用サブセット (サブセット G) については、DIS 投票が行われた。

また、リアルタイム用の仕様拡張については、ANSI の X3J1 委員会が草案が作られ、1984 年 12 月末を期限に、ANSI での郵便投票が行われている。

このような国際動向を踏まえて、本 WG は以下の活動を行った。

(1) PL/I 改訂仕様の審議と現規格の見直し

前年に引き続き、ANSI X3J1 委員会より検討資料を入手し、69 件の提案を審議し、日本の考え方を明確にするとともに次期規格に備えて各提案を整理票としてまとめている。また、IS の見直しに関する質問事項に対しては、現規格を ①分かりやすい表現に変えるべきである、②広く流通している処理系の仕様に合わせるべきである、との意見を付けて回答した。

(2) 汎用サブセットの DIS 投票

汎用サブセットの意義は十分認められること、DP 投票時に日本意見が受け入れられていること、および DP 投票に賛成していることから、賛成投票した。

(3) GKS インタフェースの検討

前年に引き続き、PL/I プログラムから GKS (Graphical Kernel System) を利用する場合のインタフェースを検討し、GKS のパラメータに関する FORTRAN と PL/I の型の整合などについての問題点を Graphics WG に提起した。

また、国内各社のグラフィックスシステムを調査した。今後、PL/I の言語仕様にグラフィックス処理を導入する場合の参考にする予定である。

6.5 SC 5/COBOL WG

主査 西村 恕彦

国際規格 COBOL の改訂案 97/5 N 854 の審議と投票が進み、DIS 1989 となった。日本をはじめ 18 カ国が賛成、オーストラリアが反対、アイルランド、ルーマニアが棄権であった。

1985 年 4 月から 2 年間をかけて、日本工業規格の COBOL を改正すべく、工業技術院と折衝している。

6.6 SC 5/FORTRAN WG

主査 菅 忠義

(1) 国際情勢

(a) ANSI X3J3 の活動

ISO の FORTRAN に関する実質的活動は、ANSI X3J3 に委託されている。X3J3 は相変らず米国の各地で隔月に 7 日間 ホテルに泊り込みで毎日 8:15 A.M. ~ 5:15 P.M. までいくつかの分科会に分れて議論し、開発作業を続けている。最近では、FORTRAN 8X について一応まとめられた内容が S 6.81 という文書になっていたが、1984 年 4 月に、新たに S7 という文書が作成されることが予告されていた。

(b) ISO/TC 97/SC 5/WG 9

1984 年 4 月 9 日~12 日、ジュネーブで SC 5/WG 9 が開かれた。日本からは SC 5 の中田氏が出席した。Draft Agenda によると、FORTRAN 8X について、S7 (今までの作業をまとめたもの) によって、ANSI X3J3 から説明があることになっていたが、中田氏の持ち帰った資料には S7 はなかった。また、中田氏の資料によると、各国からの意見が文書によって提出されている。なお、ISO/TC 97 が改組され、SC 5 が SC 22 となり、SC 5/WG 9 FORTRAN は SC 22/WG 5 となることになった。

(2) 国内活動

(a) FORTRAN 8X

8Xについては、すでにS 6.79 つづいてS 6.81 という文書にこれまでの成果が暫定的にまとめられており、委員会ではこれによって審議を行ってきたが、4月にS 7を入手したので、以後は、これによって審議をすることにした。8Xの内容の各項目については、すでに、S 6.176, S 6.81によって一応審議済みであるが、S 7によって再度議論をすることにした。しかし、S 7の内容は未完成の部分かなりあり、8Xの内容はいまだ流動的と思われる。

(b) JIS FORTRAN

1984年度に入ってから、JIS FORTRANについてのコメントは来っていない。昨年の活動報告に述べたように、1983年度中に寄せられたコメントや見つけられた編集上の誤りは、4月にまとめて工業技術院へ送付した。

6.7 SC 5/Pascal WG

主査 和田 英一

(1) 2年前の本欄でちょっと触れた米国(ANSI)のPascal拡張案だが、これをNew Work Item (NWI)にするかどうかの投票があった。検討項目の案としてANSI X 3 J 9/83-076, 83-077の膨大なドキュメントと一緒に投票の要請がきた。このドキュメントを全部見るのも大変だが、ACM Sigplan Notices, 1984年7月号に要約がのっている(それでも37ページある)から、興味のある人はそちらを見てほしい。

さて、我が国はNWIにするのは結構だが、積極的には作業を引き受けないと返事した。投票結果は積極派が足りなくて、NWIとしては採用されなかった。

Pascalの基本部分の規格作りに熱心だった英国(BSI)も消極派の一員であった。それは米国の提案した拡張案がANSIのPascal規格の上への拡張案に見える；これではISOの規格といえない；英国は別にISOの規格に基づいた拡張案を作業中である；という理由による。

この投票で米国の拡張案の国際規格化が流れると、これまでずっと休んでいたISO Pascal WGが急に動き出した。基本部分にもいろいろ虫がいてSigplan誌を眠らせているが、基本部分、拡張部分を合わせ、総合的にPascalの規格を考え直そうというので、来年2月下旬、会議が英国のICLで開かれる。

(2) 国内活動としては、ANSIのドキュメントの

コピーをメンバに送って眺めただけで、会合は開かなかった。共立出版から「Pascalの標準化—ISO規格全訳とその解説—」が出版された。この出版は当WGの活動とは関係ない。

6.8 SC 5/Graphics WG

主査 穂坂 衛

(1) 概要

グラフィックスWGの作業は、多岐に渡り、SC 5のなかで、最も仕事量の多いWGとなった。しかし、TC 97の改組に当たり、各国の強い反対にもかかわらず、どういう理由かわからないが、このWGはSC 21の中に入れられてしまった。WG 2はそのためにオーバーヘッドが増え、スケジュールが乱されることに強い懸念を表明した。各国のうちで、グラフィックスのグループの強い所は、それに束縛されずペースを崩さず作業を進めているが、我が国ではそうはいかず、約束に反してオーバーヘッドの増大、事務処理の遅れのため、改組以後、この国内委員会の作業は著しくやりにくくなったのが実情である。なんらかの対策を行わなければならない。

グラフィックスの標準化は、OSIのためにだけ必要なのではない。我が国では、グラフィックスはOSIのためのものと率直に解釈しているところが、他国と違うところなのであろう。

(2) 国際活動

(a) GKS

すでにDISになっている文書に編修上の改定が加えられ、1984年10月付の文書が、ISになる予定である。英独仏ではすでに国家規格になっている。米、カナダなどは間もなく出る。

これは、グラフィックス・ワークステーションの仮想端末にたいして、装置独立に2次元グラフィックス情報の入出力の機能を規定するもので、282頁の文書である。JISのための作業も、次年度から始められる予定である。

(b) 言語接続

GKS, PHIGS, メタファイル, インタフェースなどは、言語独立であるから、各種言語との接続を規定する必要がある。FORTRAN (120頁), Pascal (62頁), Ada, C, BASICに対して作業が進んでいる。このうち、FORTRANとの結合はすでにDPとなっており、PascalはSC 21のグラフィックスWGとしてのDPのための再投票がこれから行われることになる

(c) 3次元 GKS

グラフィックスの3次元特有の問題を取り扱えるように、現 GKS に付加すべき機能を規定する。木村文彦（東大）が分科会に参加している。オランダがまとめた案に、修正が加えられ、現在、DP になる直前である。これは、我々の意見も入り、全体としてよく考えられており、ハードウェアの発展に対しても十分に対応ができる。

(d) グラフィックス・メタファイル

グラフィックス情報の貯蔵、移動を可能にするための規定で、以前は仮想デバイス・メタファイルと呼ばれていたものである。これは、表示装置に出力する前の画としての情報を、取り扱いの対象とする。文書は4部からなり、機能記述、キャラクタでのコード化、2進コード化、テキストとしてのコード化に関するもので、それぞれ169頁、57頁、52頁、38頁の文書である。現在第2回目の DP 郵便投票の段階にある。

(e) インタフェース

装置独立に標準化されたグラフィックス情報と、一般のグラフィックス・デバイスとの間のインタフェースを標準化してデバイス・メーカーへの指針とする規定で、ANSI から原案が間もなく出てくる予定である。

(f) PHIGS

大規模なグラフィックス・システムで、図形情報の構造化、高度なインタラクティブ機能、動的表示などを取り扱えることを目的とする規定で、ANSI が原案を提出し、現在郵便投票の段階にある。

(g) 仕様と検証

仕様決定や標準の検証のための道具を作ることで、独英が中心になって作業をすすめている。

(h) グラフィックス項目登録手続き

グラフィックスの分野でなお問題が残っているため、それを取り上げる手続きを定める。

(3) 国内活動

国内委員会は数回開催され、GKS、および3次元拡張についての意見書の作成、および、メタファイルの原案を、特定グループで審議し、委員会の承認を経て、意見提出や郵便投票の案を作った。木村は1984年6月にフランスの Benodet で開かれた WG 2 の会議に出席して討議に参加し、我が国の状況、意見を述べ、特に GKS、3次元拡張案に対して貢献している。9月以降、SC 21 に編入されたため、情報の遅れとその対策の仕事が増え、十分なホロウアップと審議ができない状況にある。

この委員会とは別に、情報処理学会のグラフィックスと CAD の研究会では、84年3月にも、前期と同様に標準化問題を取り上げ、啓蒙と関心を持ってもらう努力を行ってきた。米国では GKS 準拠のグラフィックスパッケージが出回り始めた。我が国でも同様な兆候がみえてきた。

6.9 SC 6: Telecommunications and Information Exchange between Systems

主査 澁谷多喜夫

(1) 概 要

SC 6 は、通信回線を介して計算機、端末装置相互間でデータ転送を行うために必要な通信規約の標準化活動を行ってきた (OSI の7レイヤモデルの下位3レイヤに対応)。1984年5月の TC 97 総会で決定された改組に基づき、新たに二つの WG (WG 4, WG 5) が追加され、標準化活動の範囲が拡大された。

1984年は、ハイレベルデータリンク制御手順 (HDLC) の機能拡充のための手順要素に対する4件の DAD (Draft Addendum) と手順クラスに対する3件の DAD を作成し、それぞれ一つの DAD に統合化することとした。その他ローカルエリアネットワーク (LAN) に関する2件の Draft Proposal を含むデータリンクレイヤに関する3件の Draft Proposal, ネットワークレイヤのプロトコルとサービス定義に関する4件の Draft Proposal, コネクタのピン配置など物理レイヤに関する3件の DAD と2件の Draft Proposal を作成した。また、SC 14, SC 20, SC 21, CCITT SG I, II, VII, VIII, XI, XVII, XVIII, COM VII, IEC/SC 48 B, IEC/TC 83/WG P & R などの関連する機関へ19件の寄書を提出した。

(2) 国内活動

SC 6 の国内委員会は、SC 6 専門委員会と三つの小委員会から構成されていた。国際場で WG 4, WG 5 が追加されたことに伴い、1984年12月、国内委員会の再編成を行い、国際の WG 4 と WG 5 に対応して当面一つの小委員会を追加することとした。1984年には8回の専門委員会と49回の小委員会を開催し郵便投票に対する回答、国際会議に提出する寄書、国際会議への対処方針などを検討・審議した。

(a) 郵便投票への対応

1984年に回答した郵便投票は次のとおりである。

(i) データリンクレイヤ関連 賛成; 8件 コメント付き賛成; 2件 反対; 2件

反対投票は、二次局からの切断要求用 RD レスポ

スの使用法およびマルチポイントデータリンク設定時の all-station, group アドレス使用法の HDLC 手順クラス (ISO 7809) への記述追加に対してであり、原則として規格にオプション機能を記述すべきでない」と判断したためである。

(ii) ネットワークレイヤ関連 賛成; 2件 コメント付き賛成; 3件

(iii) 物理レイヤ関連 賛成; 5件 コメント付き賛成; 2件 反対; 2件

反対投票は、①然り対線を用いたマルチポイント接続および ②DTE 源タイミング信号を用い、CCITT 勧告 X. 24 に従った DTE 間接続に対してであり、①は速度配線形態、環境条件などが非常に変化に富んでいるため接続方式の標準化は不可能に近く、国際規格の必要性もないと判断し、②は勧告 X. 24 がデータ通信網用であって、本来 DTE にタイミング源は不要であり、国内の DTE もタイミング源を持たないものがほとんどで、適用対象が無いに等しいと判断したためである。

(iv) トランスポートレイヤ関連 コメント付き賛成; 1件 反対; 2件

反対投票は、①コネクションレス (CL) トランスポートプロトコルおよび ②ネットワークコネクション管理サブプロトコルに対してであり、①は状態遷移表上の不備のため、変更を行い、②は無応答状態を避ける解決策として新たな提案を行ったためである。

(b) 国際会議へ向けての寄書の作成と対処方針の審議

データリンクレイヤ関連で3件、ネットワークレイヤ関連で5件、物理レイヤ関連で5件の寄書を作成し SC 6 事務局へ提出した。これらの寄書は Draft Proposal などへ反映されたほか、検討の基礎資料として活用された。特に HDLC 手順の XID 情報フィールドの内容とフォーマットについては日本提案の柔軟なフィールド定義方法が採用され、また、実ネットワークの多様性などに対処するために、ネットワークアドレッシングにおいてカナ/漢字の使用を可能にすべきであるという日本提案がナショナルキャラクタの追加という形で受け入れられた。さらに、データ回線の障害切り分け、インタフェース信号品質の標準化作業において、日本提案が中心的な役割を果たした。

(3) 国際活動

1984年2月27日～3月1日に SC 6/WG 3 会議がトリノ(イタリア)、3月5日～9日に SC 6/WG 1 会

議がストックホルム(スウェーデン)、4月2日～11日に SC 6/WG 2 会議がチューリッヒ(スイス)で開催され、日本から各々1名、2名、3名が参加した。また、10月22日～26日に SC 6 第21回総会および WG 会議がワシントン(米国)で開催され、日本から8名が参加した。これらの国際会議の主な審議状況は以下のとおりである。

(a) SC 6 再編成

TC 97 総会決議に基づき SC 6 の作業分野の整理が行われ、トランスポートレイヤ(レイヤ4)を扱う WG 4 と物理レイヤ～トランスポートレイヤのアーキテクチャを扱う WG 5 の新設が承認された。

(b) 長期会議計画

1986年秋の SC 6 総会および WG 会議を日本で開催することを正式に受諾した。

(c) データリンクレイヤ関連

1) リングトポロジ LAN (トークンリング、スロットティドリング) の二つの媒体アクセス法について Draft Proposal とすることが合意され、郵便投票に付されることとなった。

2) XID 情報フィールドの内容およびフォーマットについて Draft Proposal が作成され、郵便投票に付されることとなった。

3) データリンクサービス定義について第7 Draft が作成されたが LAN の論理リンク制御のサービスプリミティブとの相違を解決すべく検討が継続された。

(d) ネットワークレイヤ関連

1) ネットワークサービス定義中のコネクションオリエンテッド (CO) ネットワークサービスと CCITT 勧告 X. 213「ネットワークサービス定義」の間の技術的な差異が判明し、今後 CCITT との調整が必要となった。

2) ネットワークサービスプロトコルの標準化が進展した。特に CL ネットワークサービスプロトコルの国際規格化のための編集会議が開催されることとなった。

(e) 物理レイヤ関連

1) ISDN 用コネクタの選定とピン配置については、米国案をベースに Draft Proposal が作成され、郵便投票に付されることとなった。

2) 25, 37, 15 ピンの既設定コネクタ規格の見直しを行い、ラッチングに関する DAD を規格本文と一体化した上で郵便投票に付されることとなった。

3) データ回線の障害切り分けについて、日本提案

をベースに作業文書が作成され、各国で検討することとなった。

6.10 SC 7: Software Development and Systems Documentation

主査 菅 忠義

(1) 概 要

情報処理の分野において、国際的にも、業界でも、1980年代に入ってからソフトウェア関連の標準化の重要性の認識が急速に深まってきた。その反映としてSC 7の活動はますます活発になってきた。幹事国がスウェーデンからカナダに移行し、SC 7の title と scope が次のように改められた。

Title: Software Development and Systems Documentation

Scope: Standardization of techniques and methods necessary for software development, documentation and evaluation throughout a system's life cycle

(2) 国際活動

(a) 投票

(i) DIS 5807.2 (データ流れ図, プログラム流れ図, プログラム網図, システム資源図): 賛成投票(6月), 結果 DIS 承認。

(ii) DIS 6592 (Guidelines for the documentation of computer-based application systems): 賛成投票(9月), 結果 DIS 承認。

(iii) DIS 6593 (Program flow for processing sequential files in terms of record groups): 反対投票(8月), 結果 DIS 承認。

(iv) DP 8631 (Program constructs): 賛成投票(9月)。

(v) DP 8790 (Symbols and Conversion for configuration diagram): 賛成投票(1985年1月)。

(vi) New work item: Data flow diagram (N 1473): コメント付き賛成投票(1985年2月), Existing documents として挙げられているものがN 260, N 294 になっているが、一般的立場から広くこの問題を調査して規格の作成をするのならば賛成。

(vii) New work item: Module relationship chart (N 1474): コメント付き賛成投票(1985年2月), コメントは(vi)と同様。

(b) 日本が作成して ISO へ提出した文書(主な国内活動)

(i) N 352 (Japanese comments on DIS 5807.2): トロント会議用文書。

(ii) N 337 (Japanese proposal for documentation of consumer software packages): これは N 264 (program documentation) として提出した日本案の改訂版である。トロント会議用文書。

(iii) N 357 (Symbols and Conversion of configuration diagram) 日本案 N 227, N 319 の改訂版である。トロント会議用文書。

(iv) Revised N 337: トロント会議での議決によって、各国(ドイツとアメリカ)からのコメントによって N 337 を修正して作成したもの。ミュンヘン会議 WG 2 用文書。

(v) Criteria of evaluation for software quality: ミュンヘン会議 WG 3 用文書。

(vi) List of items for long range schedule: 次回国際会議(ロンドン)用文書。

(c) 国際会議(第12回 SC 7 国際会議)

(i) 日時・場所: 1984年6月25日~27日, トロント。

(ii) 出席者: 菅(学習院大), 松山(富士通), 東(日電), 金子(東芝), 黒田(三菱電), 長野(通研), 松原(ソフト協), 二村(日立)のほか、カナダ11人, フランス4人, ドイツ3人, オランダ1人, イギリス3人, アメリカ1人, 合計31名。

(iii) 主な議題と審議結果:

① SC 7の title と scope の変更((1)に示したとおり)

② DIS 5807.2: 日本のコメント N 352, オランダのコメント N 355 を各国が承認し、これに従って DIS 5807.2 を修正したものを DIS とすることとなった。

③ Program Constructs (N 307, DP 8631): N 307 が DP 8631 として登録されたことが報告された。Program Constructs の図的表現として各国が提出していた実例を annex として付け、これも規格とすることが、昨年の会議では、日本の意見に反してオランダの強い主張で一応承認されていたが、今回は従来、日本が主張している、“国際規格にするのなら一つに統一すべきであり、それが早急にできないのならば、規格ではなく単なる例として付録にのせるべきである”という意見が全会一致で承認された。annex を appendix とし、その頭書きに単なる例であることを明記することになった。

④ N 357: 日本案 N 357 に沿って、イギリスおよびドイツのコメントを考慮しつつ審議が進められた。

記憶装置をアクセス法で分類することになったが、その際、集団記憶装置の扱いが問題になった。N 357 を DP として登録し、次の国際会議で fast track DIS の処置をとることになった。

⑤ N 337: 日本案 N 337 に沿って審議が進められた。10月までに各国がコメントを日本へ送り、それによって Revision of N 337 を日本が作成し、1985年2月にミュンヘンで WG 2 を開いてまとめ、次の国際会議で fast track DIS の処置をとることになった。

⑥ フランス提案の New work item (Software development methods): この提案に日本とイギリスが反対していたが、それはフランスの提案内容が Warnier 法そのものであったためである。一般的な立場から標準化の作業をすることが表明されたので、日本、イギリスも賛成し、item として採用されることになった。

⑦ プログラムの評価基準: これについてはかなり議論が行われたが、具体的な形にはならなかった。1985年2月にミュンヘンで WG 3 を開き議論することになった。

⑧ プログラミング法の評価基準: この item は、"criteria for the evaluation of software development methods" と改めることになり各国の寄書が求められた。

⑨ SC 7 の work item を見直し、長期計画をたてて、組織的に item を選んで作業を行うことになった。これについての寄書が各国に求められた。

⑩ 次回、1985年6月ロンドンで第13回 SC 7 国際会議を開くこととなる。なお、1986年は日本で開いて欲しいという要請があった。

(3) 国内活動

日本が提案し、主導的に原案を作成してきた item の改訂作業と新しい提案の原案作成が主な活動であった。具体的には次のとおり。

(a) 6月まで: トロント会議の準備作業を行って、(2)(b), (i)(ii)(iii)に示した文書を作成した。

(b) 7月以後: ミュンヘン WG 2, WG 3 会議のための準備作業を行って、(2)(b), (iv)(v)(vi)に示した文書を作成した。

6.11 SC 9: Programming Language for Numerical Control

主査 研野 和人

TC 184 (Industrial Automation Systems) の設立

が決定し、これに伴い、日本の引受け機関について検討されていた。1984年12月に、工業技術院の指導のもとに、1984年度(1985年3月)の引受け機関として、日本工作機械工業会が決定した。これに伴い、TC 97 の SC 9 は、TC 184 の SC 3 (Non Device Specific Language) に引継がれ、当学会から精機学会に移管された。これまでの当学会での活動が十分に活用され、新しい活動が展開されることを期待したい。

1983年度に受託した「数値制御パートプログラム用言語」の JIS 原案は、1984年3月に工業技術院に提出した。本原案は、現在日本工業標準調査会 情報部会 規格調整専門委員会で審議中であり、今年度中(1985年3月まで)は、調整委員会の審議に対応する活動をしてきた。その内容の主なものは、編集上の規格の修正補充であった。

6.12 SC 10: Magnetic Disks

主査 金子 礼三

(1) 概要

国内委員会を一度開催し、2種の国際規格案および2種の Draft Proposal について意見を集約し郵便投票を行った。

(2) 郵便投票

(a) 磁気ディスク単板の DIS の IS 化

(i) 96,000 FTPT (ϕ 200 mm), (ii) 83,000 FTPT (ϕ 130 mm) の2種の DIS について審議し、日本から提案していた技術上の修正要求項目は一昨年の国際会議で認められほとんど採録されているなどの理由により IS 化に賛成する旨の投票を行った。

(b) 磁気ディスクカートリッジの Draft Proposal

(i) ϕ 130 mm, (ii) ϕ 200 mm の2種の Draft Proposal について審議し、いずれについても3~4件の技術上のコメントを付けて、これらを 1st Draft Proposal として賛成する旨の投票を行った。

(3) 次期国際会議

1986年5月、イタリアで開催する予定である。

(4) 今後の課題

磁気ディスク単板の国際規格化作業が収束の段階をむかえ、SC 10 の活動がやや沈静化している。しかし ϕ 130 mm (5 インチ) および ϕ 95 mm (3.5 インチ) の高密度記録用の磁気ディスク単板(高保磁力塗布形および連続薄膜形)は OA 機器、データ端末の普及に伴って、近い将来生産が急増するものと予測されている。国際規格化の必要性、可能性について検討を進めることになろう。

6.13 SC 11: Flexible Magnetic Media for Digital Data Interchange

主査 石井 治

(1) 概 要

本年は6回の委員会および5回の作業小委員会を開催し、第12回 SC 11 国際会議および Ad-hoc 委員会の審議予定項目とその結果への対応について討議するとともに、5件の国際規格案と4件の Draft Proposal に対する回答と各国から提出されたコメントを審議した。

(2) 国際活動

前年のパリ会議で審議未了となった案件の処理のため2回の Ad-hoc 委員会があった。その第一は3月にロンドンで開かれて主に FDC 関連規格が審議され、日本からは磯崎真(三菱電機)ほか6名が参加した。第二として、4月にワシントンで MT カートリッジ規格の審議のためのものがあったが日本は欠席した。一方、第12回 SC 11 国際会議が10月22日から26日までベルリンで開催され、石井治(日本工業大)以下5名が出席した。以下 SC 11 本会議の概要について報告する。

(a) 磁気テープ、カセット、カートリッジ関連

① IS 1864 (未記録テープ) と DIS 8064 (小径リール) との不整合点を審議して両者を改訂することとし、特に前者は IS 1864-1984 (第3版) を刊行することになった。

② DIS 8063 と DIS 8462 のカートリッジ規格については、DIS 投票時の各国のコメントを審議・整理し、これを基に会議で指名された Editor が修正版を作成することになった。

(b) フレキシブルディスク関連

① 従来ディスク径、記録方式、記録密度、トラック密度などの相違により、個別の規格作成を行ってきたため、規格相互間で一部整合性を欠く部分が生じている。このため全規格を見直し、対処方針が審議された。

② 動作温度の上限値、トラック位置決め精度、オフセット角などの技術的課題については、試験データに基づいた規定値を採用するため、本年4月に予定されている Ad-hoc 委員会までに実験を重ねて修正案を用意することになった。

③ 以前日本が問題提起して審議が進められている130ミリ高密度 FDC については、全面 MFM 記録方式を用いる part 3 を追加することが決った。

④ 100ミリ以下 FDC に関しては、ECMA 案(N 701) をベースに審議に入ることが決議され、これを ISO 形式に修正した案を第一次ドラフトとして、各国の意見を求めることになった。

(3) 国内活動

SC 11 はフレキシブル磁気媒体の規格作成を担当し、現在10数個の作業項目の中で、磁気テープ、カートリッジ、カセット、フレキシブルディスクに関する規格案の審議を行っている。この分野は最近高性能化、小形化へと活発な技術進歩があり、規格化作業も時代の要請に対応できるように努力している。先に日本が提案した130ミリ高密度 FDC もこの流れを汲むものであって現在 DP 段階の審議が継続しており、PTB (独) による標準媒体開発の協力もあって、近い将来国際規格案成立の見通しを得ている。100ミリ以下の FDC に関しては、本来国内で生れた技術ながら ISO への新作業項目として提案できなかったが、ECMA の提案主旨に基づき積極的に審議に参加している。

SC 11 国内委員会としては、前述のような日本で最初に開発された製品が次第に世界各国で定着しだしたのも多くなり、また将来的にも、90ミリ高密度 FDC や垂直磁気記録方式を採用した媒体・装置開発などの課題もあり、審議中の規格案はもちろん、将来動向を見通した国内活動を予定している。

6.14 SC 12: Instrumentation Magnetic Tape

主査 石井 治

本年5月の TC 97 plenary の決議の一つとして、SC 12 の活動を中止することが採択された。SC 12 は計測用磁気テープ規格の作成に長年努力してきたが、最近ドイツがOメンバに変るなど、国際活動は主にアメリカ、イギリス、フランスの三カ国に限定されてきたため、上記のような処置となった。SC 12 で現在審議中の規格案は、TC 97 のもとに WG を設定して、その審議が継続されることになっている。

6.15 SC 13: Interconnection of Equipment

主査 棟上 昭男

(1) 概 要

SC 13 では今年も新たに提案された新規作業項目は、昨年と同様に作業参加国が必要数に達しないという理由ですべて却下された。そこで審議継続中の項目のほかは、国内の自主活動を中心に作業を進めた。

(2) 国内活動

(a) チャネル・レベル・インタフェース

(i) 高速機器間インタフェース (HSSI)

これまで検討を重ねてきた、日本からの標準案候補であるミニコンピュータ用高速機器間インタフェースの英訳を完成した。この標準案は、バイト直列のデータを 20 MB/秒の速度で同期転送可能な並列リングバスであり、254 個までの装置を接続できる性能を持っている。

本規格は前東京会議でその概要を報告したものであり、本年開催予定の国際会議において正式に提案を予定していたものであるが、国際会議が取止めとなったため、今回これを新プロジェクト “High Speed Interunit Interface for Minicomputer Systems” として提案することの可否について国際事務局に問合せた。

現在本件については、物理および論理仕様書が、関連する規格との比較表および作業経緯などとともに各国に配布され、新規作業項目の提案として認めるか否かの郵便投票が行われている。

(ii) LDDI ANSI 検討案の審議

LDDI (Local Distributed Interface) は、前東京会議で米国 (NCR) から提案された高速 LAN の一種であるが、今回その内容が NCR 案から DEC 社の CI バスに基づいた案に替わり、ANSI で審議されているとの情報を得たので、関連資料を入手し、その内容を検討している。

(b) デバイス・レベル・インタフェース

(i) 米国提案の Flexible Disk Drive Interface (N 286) は、新規作業項目にはならなかったものの、ANSI では 8 および 5.25 インチ FDD 用インタフェース規格として、すでに制定されている。このうち、5.25 インチ用は、日本で一般に広く利用されているインタフェースと若干食い違っている。この解決方法について、検討を行い一応の結論を得た。

(ii) 昨年に引き続いて、超小型フレキシブルディスク駆動装置 (3±1 インチ FDD) に関する統一インタフェース規格の可能性を検討した。5.25 インチ用を含めた共通インタフェースの可能性は得られたものの、コネクタのサイズを考えると、小形化が要請されている 3±1 インチ FDD に適当かどうか疑問が生じた。このため、現時点では、3±1 インチ FDD 用インタフェースを提案するのは難しいと判断し、単に問題提起にとどめることとなった。

これらは今後、次期国際会議までに、Working paper としてまとめる予定である。

(3) 国際活動

審議中であった下記 3 件の国際規格案について、以下のような投票を行った。

(i) DIS 6548 (Description of Interface between Process Computing System and Technical Process): 賛成投票を行った。

(ii) DIS 6951 (Processor System Bus Interface—Eurobus A): NATO で採用され、1~4 Byte のアドレス/データ幅を持つ、実装用コネクタおよび基板としてはユーロカードが提案されている。コメント付賛成投票を行った。

(iii) DIS 7069 (Small Computer to Peripheral Bus Interface): 文書として不鮮明かつ編集上の誤りが、多いため反対投票を行った。

以上 3 件は、問題があると思われる個所もあるが、すべて賛成多数で成立した。

(4) 今後の課題

SC 13 の幹事国ドイツは 1984 年一杯で幹事国を降りたい旨各国に通告を行った。この件は 1984 年末の TC 97 Advisory Group Meeting で 1985 年 3 月までもちこされることになったが、3 月までに新幹事国が決まらない場合には、SC 13 は消滅することになるざるを得ないという重大な事態になっている。

ドイツが幹事国を降りる表向きの理由は経済問題であるが、実際にはそれにもまして、提案される新規作業項目がすべて大部分の P メンバの賛成を得るにもかかわらず、作業参加国数が過半数に達しないため却下されるという不合理さに根ざしていると思われる。

したがって幹事国問題もさることながら、新規作業項目の採択条件の変更、あるいは P メンバの資格の再検討を行うことがより急務であり、これが行われない場合には、インタフェースの規格は ISO 以外の組織で審議決定することにせざるを得ないのではないかと考えられる (すでにそのような意見を表明している国も存在する)。

6.16 SC 14: Representation of Data Elements

主査 大山 政雄

SC 14 はデータコード (Representation of Data Element) の標準化活動を行っている。

1984 年には、3 回の専門委員会と 1 回の Ad-hoc meeting を開催し、以下のように審議を行った。

(1) 標準化指針

前回のロンドン会議で DP を再編成することになり WG を構成して作業を進めている。我が国も WG の

メンバを中心に草案の作成、コメントの発信を行ってきた。現在は DP としてのとりまとめを行っている。

(2) データ要素の表示法

昨年あらたに作業項目として登録され、現在英国の作成した草案が祖上にある。これについて討議しコメントを発信した。

(3) 検査文字システム (IS 7064)

昨年あらたに IS となった。これの国内における取扱いについて、SC 14 としての考え方をまとめた。当面は JIS 化の推進は見送るが、IS の技術的文書としての活用をはかることとした。

(4) データコード管理

これは「データ」の交換に関係する事項の国際規格化活動に関して、データコードの標準化の見地から、総合的な調整・推進をはかるグループの設置を求めている英国などの主張を受け、TAG 7 の勧告によりまず SC 14 でその必要性を検討することになったものである。多大の影響力をもつテーマであり現在慎重に討議を進めている。

(5) そ の 他

「OSI のネットワークアドレスの表示」に ISO 6523 (組織の識別コード) を適用する件、および新規作業項目案「臨床医学データの伝送」などについて審議した。

6.17 SC 15: Labelling and File Structure

主査 瀬野 健治

(1) 概 要

(a) 次の2件が国際規格となった。

(i) 数値の文字列表現 (Representation of numerical values in character strings for information interchange-ISO 6039)

(ii) データ記述ファイルの規格 (Specification for a data descriptive file for information interchange-ISO 8211)

これらの規格は TC 97 の改組に伴い、新設の Sub-Committee SC 21 に引き継がれ、今後の取扱いは SC 21 の所管となる。

(b) 次の規格改訂案が国際規格案となった。

情報交換用磁気テープのラベルとファイル構成 (File structure and labelling of magnetic tapes for information interchange-現 ISO 1001 の改訂)

(c) SC 15 の幹事国が英国からスイスに交替した。

(2) 国際活動

第9回 SC 15 国際会議が1984年9月24~28日にジュネーブで開催され、日本から平須賀(日本 IBM) 後藤(日本電気)の2名が参加した。

主な審議事項とその結果は次のとおりである。

(a) DIS 6093・2 (数値の文字列表現)

郵便投票の結果、従前からの争点である小数点表示にコンマ(,)を許すかどうかでなお意見が対立し、日本と米国が引き続きこれに反対したが、ヨーロッパ諸国の賛成多数で賛成票が82%に達し ISO の国際規格成立の条件に適合したので、フルストップ(.)とコンマ(,)のどちらも小数点表示に用いる原案を国際規格にすることを決議した。

(b) DIS 8211 (データ記述ファイル)

本規格は情報交換用ファイルにデータ記述レコードを設け、ファイル中に含まれるレコードの構造(フィールド名、フィールドサイズなど)やレコードに含まれるデータの形(文字、数値、ベクトル、アレイなど)を記述し、情報交換の促進を図ろうとするもので、今日までの審議で技術的な問題は解決されており、DISに各国のコメントによる細い修正を加え国際規格とした。

(c) ISO 1001 改訂 (情報交換用磁気テープのラベルとファイル構成)

改訂草案 N 172 (ANSI 提案) N 180 (ECMA 提案) およびそれらに対する各国コメントを審議し国際規格案を作成した。本規格案は現在の規格に対してさらに情報交換のフレキシビリティを増すとともに、正確な情報交換が保証されるようにしようとするもので、主な改訂は次のとおりである。

(i) ボリュームラベルの拡張 (VOL 2~9 の新設)

(ii) 第2ファイルヘッダラベル (FHL 2) を全情報交換水準 (レベル1~4) で必須ラベルとする。

(iii) 情報交換におけるラベルとファイルの処理について、情報処理システムとユーザの実行すべき役割(ブロックやレコードの許容最大長の設定やボリュームおよびファイルのアクセス権のチェックなど)を区分して、明確に規定する。

(3) 今後の課題

SC 15 国内委員会としては、ISO 1001の改訂案の審議について、ファイルの作成および廃棄日付に世紀の区分を追加する国際規格案が現行の JIS との整合性で問題を生ずるので、これの対処を検討しなければならない。その他には本委員会には特に重要な課題がないが、フレキシブルディスクのラベルとファイル構成の

規格に関して、3インチ、3.5インチの媒体の規格化の進歩に合わせて現行規格のそれらへの適合性について検討を行うこととしたい。

**6.18 SC 16: Open Systems Interconnection
SC 21: Information Retrieval, Transfer
and Management for Open Systems In-
terconnection (1984年10月から)**

主査 元岡 達

(1) 概 要

SC 16 は、開放型システム間相互接続 (OSI) の参照モデルに加えて、トランスポート層、セッション層およびプレゼンテーション層の通信規約 (プロトコル)、ならびに、応用層に位置付けられる仮想端末プロトコル、ファイル転送・アクセスプロトコル、ジョブ転送プロトコル、応用/システム管理プロトコルなどに関する標準化活動を行ってきた。1984年には、トランスポート層の国際規格 (ISO 8072, 8073)、セッション層の国際規格 (ISO 8326, 8327)、コネクションレス型データ伝送のための参照モデルのアデンダム案 (ISO 7498 DAD/1) および 10 件の Draft Proposal を作成した。

また、1984年5月の TC 97 総会で TC 97 の改組が行われた結果 SC 16 は終結してその主要担務は新たに SC 21 が引き継ぐこととなった。SC 21 は、従来 SC 5, SC 15 で検討されていたデータベース、オペレーティングシステム、グラフィックス関連の作業項目を含め体系的に標準化作業を行うこととなったので、国内でもこれに対応して SC 16 専門委員会を改組し、SC 21 専門委員会を10月に発足させた。なお、これに伴いトランスポート層の標準化作業は、SC 6 に移管された。

(2) 国 際 活 動

1984年には、それぞれ、1回の WG 1 会議、WG 4 会議、WG 5 会議、WG 6 会議、および 23 回の SC 16 編集会議/WG Ad-hoc 会議が開催され、日本からは延 31 名が出席した。また、TC 97 の改組に伴う SC 21 の方針を審議するための SC 21 プラニング会議および SC 16 各国代表者会議がそれぞれ 1 回開催され、日本からは計 7 名が出席した。これらの会議の主な結果は、次のとおりである。

(a) SC 16/WG 1 (SC 21/WG 16-1)

ISO 7498 “OSI 基本参照モデル”を発行した。また、コネクションレス型データ伝送のための参照モデルへの追加内容 (ISO 7498 DAD/1) およびサービス定義の記法 (2nd DP 8509) を作成した。さらに、形式記述

技法、名前とアドレス、コンフォーマンス試験、セキュリティアーキテクチャなどの Working Draft を作成/更新した。サービス定義の記法、形式記述技法については、CCITT 勧告 X.210, 250 との整合性を考慮しながら検討を進めた。名前とアドレスおよびセキュリティアーキテクチャについては、1985年に Draft Proposal を作成する予定である。

(b) SC 16/WG 4 (SC 21/WG 16-4)

応用層の各種応用プロトコルが共通的に使用する共通応用サービス要素の一つであり分散処理における同期制御を実現するコミットメント制御・排他制御・回復 (CCR) のサービス定義 (DP 8649/3) とプロトコル仕様 (DP 8650/3) を作成した。また、ディレクトリ管理、障害管理、応用プロセス群管理などの応用/システム管理について検討し、それぞれのサービス定義に関する Working Draft を作成/更新した。ディレクトリ管理および障害管理については、1985年に Draft Proposal を作成する予定である。

(c) SC 16/WG 5 (SC 21/WG 16-5)

プレゼンテーション層のサービス定義 (DP 8822) とプロトコル仕様 (DP 8823)、ならびに抽象構文記述仕様 (DP 8824) とそのコーディング規則 (DP 8825) を作成した。

応用層では、ジョブ転送のサービス定義 (DP 8831) とプロトコル仕様 (DP 8832)、共通応用サービス要素の定義 (DP 8649/1) とプロトコル仕様 (DP 8650/1) を作成した。また、ファイル転送・アクセスのためのサービス定義およびプロトコル仕様については、Draft Proposal の改版を行った (2nd DP 8571/1~4)・仮想端末のサービス定義とプロトコル仕様については、Working Draft を更新した。仮想端末については、1985年に Draft Proposal を作成する予定である。

(d) SC 16/WG 6 (SC 21/WG 16-6)

IS 8072, 8073, 8326, 8327 を作成したほか、トランスポート層のコネクションレス型のサービス定義 (ISO 8072 2nd proposed DAD/1) とプロトコル仕様 (2nd DP 8602) およびネットワークコネクション管理プロトコル (ISO 8073 2nd proposed DAD/1) を改版した。ISO 8072, 8073, 8326, 8327 については、CCITT と合同編集会議を開催し、それぞれ CCITT 勧告 X.214, 224, 215, 225 と技術的には同じ記述内容とした。また、コネクションレス型ネットワークサービスを利用するためのトランスポートプロトコル仕様への追加内容 (ISO 8073 DAD/22)、および対称各同期方式のセ

クション層への追加内容(ISO 8326 proposed DAD, ISO 8327 proposed DAD)を作成した。さらに、セッション層のコネクションレス型のサービス定義とプロトコル仕様の Working Draft を作成した。

(e) SC 21 プラニング会議関係

SC 21 の名称と作業分野、新 WG の構成、移行方式などについて検討したが、詳細については、1985 年 2 月の SC 21 総会で決定することとした。

(3) 国内活動

1984 年に 8 回の専門委員会と延 73 回の小委員会を開催し、Letter Ballot の回答、国際会議に提出する寄書、国際会議への対処方針などを検討・審議した。

なお、SC 21 プラニング会議に関係した検討課題については、別途アドホックグループを設けて検討した。

(a) Letter Ballot

1984 年に回答した Letter Ballot (合計 46 件) は、次のとおりである。

(i) 登録権限、形式記述技法、共通応用サービス要素、コネクションレス型トランスポートサービス定義およびプロトコル、コンFORMANCE 試験に関する 6 件の新作業項目に対してそれぞれ賛成の回答をした。それぞれ、新しいプロジェクト番号が割り当てられた。

(ii) DIS 8072, 8073, 8326, 8327 に対して、明確化のためのコメントを付して賛成の回答をした。コメントは、それぞれの規格に反映された。

(iii) DP 8509, 8571 などの 11 件の Draft Proposal に対して賛成の回答をした。また、ISO 8073 proposed DAD/1, DP 8649, DP 8650, DP 8822, DP 8823, DP 8824, DP 8825 に関する延 10 件については、いずれも技術的な問題があるため反対した。提出したコメントは、ほとんどそれぞれの文書に反映された。

(iv) OSI 基本参照モデルの解釈に関する問題の 11 件の Letter Ballot のうち、8 件に対して賛成、3 件に対してはコメントを付して賛成した。これらは、最終解釈の作成または検討の進展に役立った。

(v) その他 Draft Proposal 登録に関するものなど 4 件の Letter Ballot に賛成の回答をした。

(b) 国際会議提出寄書

SC 21 プラニング会議への寄書を、1 件、WG 1 関係の寄書を 13 件、WG 4 関係の寄書を 16 件、WG 5 関係の寄書を 15 件、WG 6 関係の寄書を 8 件、合計 53 件の寄書を提出した。これらの寄書は、Draft Proposal や Working Draft に反映されるか、または検

討の基礎資料として活用された。

また、1985 年 2 月の SC 21 総会および WG 会議に向け合計 46 件の寄書を提出した。

(c) その他

SC 21 の WG の構成は、国際的にも暫定体制にあることを考慮し、SC 21 専門委員会としても当面は暫定体制をとることとした。具体的には、従来の SC 16 の 4 つの WG (WG 1, 4, 5, 6) に SC 5 専門委員会から移管されたグラフィクス関連 (WG 2)、新設のデータベース関連 (WG 3) を加えた 6 つの WG で構成し、国際的に WG の構成が明確になった時点で再度見直すこととした。なお、トランスポート層の課題については、12 月に SC 6 専門委員会に対する事務引き継ぎを行った。

6.19 SC 17: Identification and Credit Cards

主査 木澤 誠

(1) 概要

SC 17 の担当は識別カードとクレジット・カードで、カードのハードウェア的性質はもとより、データ内容のように使用者の大きく関与すべき事項も多い。WG は 1~7 (うち WG 2 は任務終了により廃止) の 6 個が設けられ、活動の中心は現在各 WG に移っている。

(2) 国際活動

第 13 回の SC 17 国際会議は 1984 年 11 月 5~9 日にドイツ連邦共和国ベルリン市において開催され、我が国からは木澤誠 (図書館情報大学)、尾澤好一 (日本エヌ・シー・アール)、高田輝男 (全国銀行協会連合会) および高橋廣光 (三菱電機) の 4 名が出席した。主な決定事項は下記のとおりである。

(a) WG 1 (カードの物理的特性と試験方法) 関係 コンビーナ F. Graf Waldburg 氏の辞任に伴い、後任を引続き西独が引受けることとした。

DIS 7810 (Identification Cards—Physical Characteristics) および 7811/2 (Identification Cards—Recording Technique—Part 2: Magnetic Stripe) をそれぞれ一部修正の上 ISO Council に送付することとした。

(b) WG 3 (旅券カード) 関係

前回の会議で幹事国がスウェーデンからカナダに交替したが、コンビーナとして C. B. Fischer 氏 (IATA) が決定した。

(c) WG 4 (IC カード) 関係

DP 7816/2 (Integrated Circuits with Contacts—

Part 2: Dimension and Location of the Contacts) の投票日を1985年4月30日まで延期した。これはフランスの提案により各国のカードのテスト結果を待つことにしたものである。

(d) WG 5 (カード発行者番号) 関係

(i) MII (Major Industry Identifier) 3, 6 および 7 の発行者番号を 4 桁または 5 桁から 6 桁へ拡大することを確認するとともに、1989 年 12 月までの例外措置を決めた。

(ii) Telecommunication Industry の MII は “89” とし、その後に関名コード 3 桁を続けることとした。

(iii) 航空会社に与えられている MII 1 および 2 のうち、23××～29××については1988年1月以降 ISO へ返戻されることとなった。

(e) WG 6 (磁気通帳) 関係

コンビーナ R. Petersen 氏の辞任により後任を W. Jäger 氏と決定。

(f) WG 7 (トラック 1 および 2 のデータ内容) 関係

ID/SC コードに係る DIS 7813 の改正、PAN length Network Code の採用、ID/SC コードの国際登録につき、WG 7 へ検討を委嘱した。

(g) そ の 他

(i) TC 68 (銀行事務) との分野調整のため、Ad-hoc 委員会が作られた。

(ii) SC 17 の幹事国がアメリカ (ANSI) からイギリス (BSI) に移された。この機会に今までずっと SC 17 の議長を続けてきた J. Macfarlane 氏を SC 17 の終身メンバとした。

(3) 国内活動

SC 17 の国内委員会は同 SC が TC 95 に属していた時代から (社) 日本事務機械工業会に設けられ、WG 1, WG 4, WG 6 および WG A (WG 5 および 7 に対応) の 4 分科会がそれぞれ担当の国際活動に対応する国内活動を行っており、特に WG 4 と WG A とは目下相当多忙である。WG 4 は日本がフランス、アメリカとともに中心メンバであるため比較的高頻度の国際会議 (Ad-hoc も含む) にすべて出席し、これを支える国内会議も頻繁に開催して活動している。期を同じくして IC カードに対する国内利用者の関心が急に高まったので、その責務も重くなった。WG 5 は日本は国際的に出遅れていたが、カード発行者番号の登録手続の国内態勢の整備を行うとともに、日本 JCB

および日本割賦協会のブロック番号その他の国際登録にも成功して、国際的な動きに対応できる力を備えてきた。WG 6 は国内ですでに使用されている磁気通帳があまりにも多様で、標準化は困難を極める状態であるために、国際標準化の進行と国内状態との断層に苦慮している。WG 7 はどちらかといえば使用者たる銀行・金融機関などが主導権を取るべき内容であるが、国内における関心がまだ低く、国際的には密接に連繋して活動している TC 68 の国内委員会が弱体であることもあって、当国内委員会の努力にもかかわらず、実際の成果が実らない状態である。

6.20 SC 18: Text and Office Systems

主査 高橋 茂

(1) 概 要

この期間に国際会議としては SC 18 本会議が 1 回、WG の会合がそれぞれ 2 回程度開催されたほか、WG 3, 5 の合同会議、および SC 18 改組のための Ad-hoc グループ会議が開かれ、それぞれに寄書を提出して積極的に参加した (表-1 参照)。

(2) 改 組

5 月の TC 97 本会議で SC 5/WG 12 (Text Processing Languages), SC 19/WG 3 (Keyboards) および SC 19/WG 6 (TPI Equipment) が SC 18 に編入されることになった。とりあえずこれらに SC 18 としての WG の番号をそれぞれ 8, 7, 6 と与えて仕事を継続させる一方、Ad-hoc グループを設けて改組に着手した (発効は 1985 年 4 月の本会議後)。

日本は WG 2 を廃止し、WG 6, 7 を合併して WG 9 とし、WG 2 で扱っていた用語は WG 1, シンボルは WG 9 に移管することを提案して容れられた。分野が重複している WG 3 と 5 を合併する提案もあったが、大事な分野なので、境界を明確にして二つの WG を残すことになった。

なお、これらに対する Letter Ballot に際し、WG 3 と 5 の問題に関しては、当分 5 のコンビーナを決めず、会議はできるだけ合同で行うべきであるというコメントを付けた。

(3) 標準化の進捗状況

(a) WG 2 関連

最後の仕事として TOS 用語第 1 版をとりまとめ、SC 18 に提出した (扱いは SC 18 に一任)。

(b) WG 3, 5 (文書構造) 関連

さきにそれぞれから出された DP 案は一応とり下げ、両 WG のものを 1 本のマルチパート標準として

提案することになった。現在 part 1~4 が各国に送付され、Letter Ballot 待ちになっている。

(c) WG 4 (文書交換) 関連

さきに提出された DP は CCITT との互換性に問題があったので、現在 CCITT 勧告をベースにした修正案が提案され、審議されている。

(d) WG 6 (装置) 関連

テストチャート、テキストパターンに関する DP を登録する段階にある。

(e) WG 8 (文書処理言語)

従来 SC 5/WG 12 でマルチパート標準を計画しており、その一部 SGML (Standard Generalized Markup Language) が DP として提案され、日本は反対した (前記 (b) のマルチパート標準の一部とすべきであるという意見)。

(4) 国内委員会の活動

前記 (3) 項の標準化に対応する活動のほか下記のとおり。

(a) 学会誌への寄書

そろそろ DP が出る段階になったので、SC 18 に関連する標準化の動向を解説的にとりまとめ、「報告」として学会誌に寄稿した (1985 年 1 月号掲載予定)。

(b) NWI の提案と資料の準備

SC 18 で審議中の「文書の交換」は、建て前としては媒体を介する場合を含んでいるが、現在進行しているのは通信線経由の場合だけである。

一方、現実にはワードプロセッサの出力をフロッピーディスクを介して交換する場合などの互換性が大きな問題になっている。この問題を特に NWI として採上げ、まず WG 1 に提案して検討し、WG 1 の意見としては WG 3 で採上げるべきだということになった。

一方、その標準案として、10 月に制定された JIS C 6237 “日本語文書交換用ファイル仕様”をベースにしたものを用意する作業に入った。

6.21 SC 19: Office Equipment and Supplies

主査 神保 泰雄

(1) 概 要

SC 19 の担当はオフィス機器およびサブライで、近年オフィス・オートメーション化により、ネットワーク下における通信機能を具備する機器に変換しつつあり、この部分については、SC 18 の分野と密接な関係があるので、Keyboard と Text Preparation and Interchange Equipment に関する事項を扱っていた WG 3 および WG 6 は SC 18 に移行した。

このような状況下にあったこともあり、SC 19 の Plenary Meeting は開催されなかった。本 SC 19 の活動は WG 1~6 までの 6 個が設けられていたが、次年度より WG は 4 個が活動の主体となる。

(2) 国際活動

(a) WG 1 複写機モノクロ・テストチャート

DP 段階は終了して、現在、DIS 8342 として投票段階に入っている。

(d) WG 2 複写機および印刷機

上記機器用絵文字について、DP 段階は終了して、現在、DIS 6329 として投票段階にある。

(c) WG 3 キーボード

WG 3 の第 3 回国際会議は 1984 年 11 月 19 日~21 日にスペイン国パレンシア市において開催され、我が国からは尾澤好一 (日本エス・シー・アール)、斉藤渡 (沖電気) の 2 名が出席した。

主な事項は次のとおりである。

(i) ラテンアルファベット系多言語用キーボードの配列については、あくまでキーボードの配列であり、キャラクタセットはほかの規格できめていることを明示する。シフトキーファンクションについて明瞭に説明する。テキストプロセッシング用には ISO 6937/2 のコード化キャラクタセットを用いなければならない。

(ii) 数字キーボードにおける CCITT 配列と ISO 配列の調和については、スウェーデン代表が (1, 2, 3) lay out を優れていると主張、日本代表は (1, 2, 3) lay out が優れていることに反対の意見を提出したが、結局 Ad-hoc group の編成が決議され各国から一名ずつの代表を出すことになった。

(d) WG 4 郵便機械

我が国ではあまり使用されていないので不参加。

(e) WG 5 用紙の品質

コンピュータに使用するインパクトプリンタの連続用紙についてはほぼまとまりつつある。日本からノンインパクトプリンタの用紙の品質について標準化すべきであるとの提案を行っているが、NWI として活動していない。またこの他、カットシート紙の品質について日本から提案を行うべく検討中である。

(f) WG 6 文書処理および交換装置

第 5 回 WG 6 国際会議が、スウェーデン国ストックホルム市で 9 月 17 日~19 日に開催され、我が国から高橋廣光 (三菱電機) および大迫昭和 (沖電気) が出席した。

主な事項は次のとおりである。

(i) テストチャート・テキストパターン

GII, GIII, ファクシミリ用テストチャート漢字 (CCITT と同一) を追加する。GIV 用テストチャートは次回日本より提出する。

(ii) 仕様書に記載すべき最低項目、今回は編集上の修正を行い新しいワーキングドラフトを作成した。

(iii) ベーシック・オプショナル・リクワイアメントについてワーキングドラフトの修正、シンボル、その他の項目については現状の確認、今後の進め方を討議した。次回までに Ad-hoc のグループで検討し推進方法を考えることとした。

(3) 国内活動

上記国際活動に対応して国内においても活動の主体は WG であり、WG 2, 3, 5, 6 の4つの国内委員会を設置して対応している。この活動は(社)日本事務機械工業会が事務局となって、すでに20年にも達する長期の活動を行っている。

ここ数年来、ISO/TC 95 が ISO/TC 97 と合併し、今また、SC 19/WG 3 および WG 6 が、TC 97/SC 18 に移行され、この両 WG は、TC 97/SC 18/WG 9 として再編成される。この WG 9 の活動は引続き(社)日本事務機械工業会が担当している。したがって TC 97 の各 SC との連携を、さらに強め、より強力に国際標準化へ対応することが必要と考えられる。

6.22 SC 20: Data Cryptographic Techniques

主査 宮川 洋

(1) 概要

データ暗号化に関する標準化は、1981年より TC 97/WG 1 (Data Encryption) で審議されてきたが、1984年この WG は廃止され、代わって西独を幹事国として SC 20 が発足した。

SC 20 は、TC 97/WG 1 から引き継いだデータ暗号化アルゴリズム DEA 1 (DP 8227) および 64 ビットブロック暗号アルゴリズムの適用法 (DP 8372) などの標準化の審議を続けるとともに、認証、デジタル署名などの作業項目を追加し、情報処理システムのセキュリティ全般に関する標準化活動を行っている。

(2) 国際活動

1984年1月30日～2月2日、第1回 SC 20 国際会議がボンで開催され、日本からは3名が出席した。この会議では、SC 20 の体制と運営方針の審議、および TC 97/WG 1 から引き継いだ各種の国際規格草案のレビューなどが行われた。この結果、WG 1 (Secret Key

Algorithms and Applications), WG 2 (Public Key Cryptosystems and Applications), WG 3 (Use of Encipherment Techniques in Communication Architectures) の三つの WG の設置を TC 97 へ提案し、承認された。また、DEA 1 安全性調査を CESG (British Communication and Electronics Security Group) に依頼し、DEA 1 の国際規格化はその報告を待って進めることとなった。

三つの WG のうち、WG 2 は Ad-hoc 会議が1984年7月に開催された。この会議には、日本は欠席したが、寄書を1件提出した。WG 1, WG 3 は1985年1月に第1回会議を開催する予定である。

(3) 国内活動

(a) 概要

1984年には、6回の専門委員会を開催し、委員会運営方針、国際会議対処方針、郵便投票への回答、国際会議に提出する寄書などを検討・審議した。なお、国内委員会には、SC 20 の WG に対応する WG は当面置かず、本委員会で対処することとした。

(b) 郵便投票

1984年には、2件の郵便投票に回答した。このうち問題となったのは「DEA 1 の国際規格案化に先だって行われる予定であった安全性調査の完了が当初の期限 (1985年2月) より遅れることを認めるか」という郵便投票であり、これに対しては、遅れは認められないと回答した。これは標準化が遅延すると、DEA 1 標準化そのものの意義にも問題を生じ好ましくないと考えたからである。

(c) 国際会議提出寄書など

SC 20/WG 1 に公開鍵暗号方式の強化に関する寄書を提出した。また、前項で述べた郵便投票を契機として、国内委員会で、暗号アルゴリズムの標準化と暗号の安全性との係わりに関し種々の検討を行い、「国際規格では安全性に関し言及すべきではない」という趣旨の寄書を1985年の第2回 SC 20 国際会議に向けて提出した。このほか、物理層の暗号化に関する Working Draft について、多くの討論が行われ、同国際会議に向けて寄書を準備することとした。

6.23 SC 23: Optical Digital Data Disk

主査 三橋 慶喜

(1) 概要

1984年9月28日に開催された第40回 ISO/TC 97 情報処理専門委員会、第79回規格委員会合同会議において、SC 23 国内委員会の新設が了承され、主査と

して三橋（電総研）が委嘱された。これは、SC 23 の新設、日本が幹事国となること、および第1回の国際会議を1985年5月29日から31日まで東京で開催するというISO/TC 97の決定に対応したものである。

この決定に基づき、1984年8月6日付でECMAから直径が異なる4種の光ディスク（Optical Medium Units）をNWI（New Work Item）とするよう提案がなされた。これに対する日本の回答を行うため、第1回のSC 23 国内委員会を1984年10月19日に開催し、審議を行った。委員構成は、官公庁など6人、大学1人、メーカ14人、SC 15 リーゾン1人、合計22人から成っている。

標準化に対するアンケート調査の結果などを参考にして、上記NW I をすべて了承し、直径300 mm、直径200 mm、直径130 mm以下の3種のNW I に対しては積極的に取り組むことを表明することとした。

1984年12月11日に第2回の国内委員会を開催し、第1回SC 23 国際会議に向けて、日本としては130 mm以下の光ディスクを対象に提案することと、そのための準備を開始した。

標準化に当っては、光ディスク媒体メーカとドライブ装置メーカの要望、メーカとユーザの要請という2側面を常に念頭におくこと、民生用の光ディスク（VD：ビデオディスク、DAD：デジタルオーディオディスク）との整合性、技術的相違を認識すること、直径の異なる光ディスク間、あるいは今後の発展が見込まれる書換型光ディスクとの整合性を保つこと、などを考慮することとした。130 mm以下の光ディスクについては、1本化して提案を行うべく、国際的動向を十分調査し、早急に結論を出すこととした。

(2) 国内活動

国内委員会を2回開催し、早急な検討を必要とする情勢から、WG 4つ（機械的特性とカートリッジ、光学的特性と記録特性、グループ、変調方式とフォーマット）を発足させることにした。

(3) 国際活動

なし

7. 情報処理用語 JIS 原案作成委員会

主査 西野 博二

(1) 概要

JIS C 6230（情報処理用語）は、ISO 2382（データ処理用語集）に準拠すると言う方針の下で、従来のJISを大改訂して、1981年に制定された。昨年度、

ISO 2382の第9部「データ通信」と第13部「図形処理」が新たに発行されたので、これらをJIS C 6230に含めるために、工業技術院より委託を受けて、JIS原案作成委員会が発足した。

(2) 審議経過

親委員会の下で、各部ごとの詳細審議を分担する2つのWGを、次のように設けた。

WG 1: データ通信担当 主査 児西清義（電電公社）委員12名

WG 2: 図形処理担当 主査 関野 陽（日電）委員11名

現在のJIS C 6230にも、データ通信と図形処理が含まれているが、これらはISOの原案段階のものを参考にしたものなので、今回かなりの改訂が必要となっている。特に、WG 2が担当する図形処理でそれが著しい。また、この分野では日本語としての標準的な用語が定着していないので、適切な用語探しに苦勞している。

今年度中に、WG 1は5回、WG 2は8回の会合を予定し、原案作成は3月初旬に完了する見込みである。

8. ローカルエリアネットワーク JIS 原案作成委員会

主査 澁谷多喜夫

(1) 概要

当委員会で作成する規格は、建物の構内およびある地域内といった地理的に小～中程度の領域で、中～高速の物理回線を用いて通信網を構成するローカルエリアネットワーク（LAN）における論理リンク制御と媒体アクセス手順を規定することを目的に制定するものである。

委員会は、原案作成委員会と3つのWGで構成し、原案は国際規格との整合を図るためにISO/TC 97/SC 6で国際規格案（DIS）化が決定されたDP 8802/2（論理リンク制御）、DP 8802/3（CSMA/CDによるアクセス法）、DP 8802/4（トークンバスによるアクセス法）とISO/TC 97/SC 6ワシントン会議の合意事項に基づき作成することとした。検討は、1984年7月から開始し、WGでの検討結果を原案作成委員会に報告する形で進め1984年度末に中間報告を取りまとめた。最終報告は1985年度末の予定である。

(2) 審議状況

次の検討・作業を行った。

(a) DP 8802/2（WG 1）、DP 8802/3（WG 2）、

DP 8802/4 (WG 3) の翻訳

- (b) 技術用語の検討
- (c) 規格の構成の検討
- (d) 参考、解説として記述することが望ましい事項の抽出

- (e) 技術的問題点の抽出

上記検討結果を踏まえて、JIS 原案の中間報告を取りまとめた。1985年度は、さらに用語、構成などについて全体的な見直しを行い、原案を作成し最終報告とする予定である。

9. 決定表 JIS 原案作成委員会

主査 菅 忠義

(1) 制定の必要性

決定表 (decision table) はヨーロッパやアメリカではかなり広く用いられており、フランス、ドイツ、カナダが積極的に作業を進めて DIS 5806 が作成され、これの投票が1984年2月に行われ、1984年12月に ISO 5806 が制定された。日本では、決定表は大手メーカーでは、局所的に使用されているにすぎないが、いくつかのソフト会社では積極的に使用しており、また決定表から COBOL プログラムへ変換するシステムを作成し販売を行っているソフト会社もある。しかし、決定表は、むしろ一般会社やソフト会社以外の企業において条件と動作の記述に広く用いられており、その記述形式は多様であり、規格が制定されることが望ましい状態であった。そこで ISO で決定表が DIS として承認されたのを機に JIS 制定を行うこととなった。

(2) 制定の方針

日本国内での決定表の記述法は、多様であるが、日本の世界情勢における立場を考慮して、ISO 準拠を JIS 原案作成の基本方針とした。

(3) 原案作成の経過

1984年7月に工業技術院より原案作成の委託があり、9月1日に第一回の委員会を開き、原案作成の基本方針とスケジュールを定めた。それ以後毎月委員会を開き、約10回で作業を終え、1985年3月初旬に原案を完成することになっている。

(4) JIS 原案の概要

JIS 決定表の概要を示すために、各章節の表題を以下に示す。

- 1. 適用範囲
- 2. 用語の意味
- 3. 形式 3.1 決定表 3.2 条件指定

- 4. 表の要素間の関係 4.1 条件 4.2 動作 4.3 規則
- 5. 決定表間の関係 5.1 順番関係 5.2 選択関係 5.3 反復関係 5.4 入れ子関係 5.5 関係の組合せ

6. 決定表の解釈

附属書 1. 作成に関する推奨

附属書 2. 各種の決定表の例

10. OSI トランスポートサービス定義 JIS 原案作成委員会

主査 田中 英彦

(1) 概要

この規格は、昭和58年度に作成が完了した OSI 基本参照モデルで規定しているトランスポート層が、セッション層に提供するサービスを定義することを目的とするものである。

委員会は、原案作成委員会と WG より構成し、7月から DIS 8072 をベースドキュメントとして検討を開始した。最終原案は、1984年6月に開催されたコペンハーゲン会議の出力ドキュメントである SC 6 N 3214 で見直し、2月までに JIS 原案の作成を完了した。

(2) 審議経過

原案作成委員会を3回、WG を5回開催し、次の検討を行った。

- (a) DIS 8072 の翻訳・通読
- (b) 技術用語の検討
- (c) 技術的表現上の検討
- (d) 参考・解説項目の抽出
- (e) サービス記法の扱いの検討

上記の検討結果を反映し、13章から成る規格本体、附属書、参考および解説の原案を作成した。

(3) 附属書の内容

OSI サービス記法は、従来の DIS 8072 には Annex として添付されていたが、サービス記法を DP 8509 として独立の国際規格とすることとなったため、最新のトランスポートサービス定義のドキュメントからは削除されている。しかし、トランスポートサービス定義を JIS 化するには、このサービス記法を規格としておくことが必要であるので、附属書としてこの規格に含めることとした。

(4) 参考・解説の内容

参考の内容は、次のとおりである。

- (a) 関連規格との関係
- (b) コネクションレス型トランスポートサービス
定義
- (c) 用語索引 (サービス記法を含む)

また、解説は、適用範囲のほかその内容が将来見直される可能性があるサービス品質など5項目について記述している。

11. む す び

本年も各委員会および関係各委員のご尽力で、幾多の適切な技術提案、ISO会議に多くの代表を派遣するなどの貢献、SC 2 京都会議や SC 18/WG 会議を開催するなど、国際的にも国内的にもその責務を果たしたことは、各委員および関係者のご協力の賜物と感謝の意を表する。

さて、国際的に眺めてみると、3年越しの TC 97 再編成問題も、5月の第12回ストックホルム総会で一応の収束を見るにいたり、新しい TC 97 の標準活動もようやく軌道に乗り出した年と位置づけられよ

う。IEC との間に多少の熾りはあるものの、その IEC と ISO がともに CCITT から正式の liaison 機関と認められ、寄書による正式の意見表明が可能になったことも同慶のいたりである。

また、日本が、TC 97 としては初の SC 23 光ディスクの幹事国となったことも、一つの区切りを画した年だと思う。

振り返って国内の情報処理標準活動はいかがであらうか。8月末に日本工業標準調査会下に設けられた“情報技術標準化特別委員会”の設立に端を発したここ数カ月の動きには納得しかねる面もある。

とはいえ、われわれ自身の国際的活動には大きな影響はなさそうだが、これを契機として、改むべきは改め、強化すべきは強化し、ますます積極的対応を迫られる国際標準活動に対処するための基盤整備を急がねばと思っている。

事務局の強化なども、緊急な課題であろう。会員諸兄姉の積極的協力と意見の提供が俟たれる次第である。

(昭和60年5月10日受付)